世界学生選手権に参加して

第一回世界学生選手権参加日本代表団団長

棚橋義輝

私は本年元旦から六日間にわたって、スウェーデンで開かれた第一回世界学生ハンドボール選手権大会に出場する日本代表チームの団長として、北欧の国々を旅する機会に恵まれた。初めの計画ではドイツ、スウェーデン、フランスという順に三カ国だけを回る予定であった。偶然にも、それら以外のデンマークにも立ち寄る機会を得たことは幸いであった。これはスウェーデンにはいってからわかったことであるが、ちょうどそのころデンマークでルーマニアの女子ハンドボール選手を招待して国際試合の計画が進められていた矢先きであった。日本がスウェーデン大会後、各地で試合をして回ることを知ったデンマークは、日本を一枚加えようとの希望と、スウェーデンの好意ある計らいであったことらしい。

そこで私たちは、十二月十四日フランス航空機で羽田空港を出発した。十五日からドイツのハンブルグに到着、ブレーメン、ゲルセンキルヘン、オエルデ、ベッカム、オッフェンベルグの各都市選抜チームとの親善試合の旅をつづけた。ドイツにおける試合はもちろん親善にもあったが、本命のスウェーデン大会にのぞむ前にハンドボールの祖国としてのこの国で修業を兼ねることであった。それと同時にコンディションの調整をしようというところにも狙いがあったわけである。欧州においての日本はハンドボールに関する限り、なんといっても後進国の名に甘んじなければなるまい。だからこれらの計画は決して無意味でなかった。しかし考えねばならぬと思ったこともあった。欧州は夜間試合の慣行がある。さらに終了後の交歓会もある。それが深夜まで及ぶ。そのうえ一時間ないし二時間後に宿舎に帰えるスケジュールが、平気で組まれている。これでは選手たちに疲労の度が加わるのではないかと心配した。

さてこの北欧の人達ちは、われわれ日本人に対する感情はどうであったか。いづれの国々でも、われわれを好感を以て迎えてくれたことは絶対的である。なかんずくドイツ国民は親近感さえ示してくれているようにわたしは感じた。スウェーデン、デンマークでは、ことに辺地の都会の人々は好奇的好感をもっているようにも感じられた。われわれには深い親しみを感じさせた。スウェーデンのカルマ港の歓迎振りは、われわれにとっては有終の美ともいうべき盛大なものであった。

ハンドボール「第13号 目次」

7人制一本に決まる
国体に教員の部が誕生
11人制を廃止

日本ハンドボール協会は2月9日午後1時から東京お茶の水の岸体育館で全国評議員会を開き、4月から11人制をやめ、7人制の採用などを決めた。

① 11人制の廃止　すでに山口国体から7人制に切り替えることを決めたが、国際情勢が11人制から7人制への傾向にあるので、4月1日から協会の主催で行なう競技はすべて7人制とする

② 少年団の結成体協のスポーツ少年団の一組織として、4月から全国的な規模でハンドボール少年団を結成する。

③ 38年度の新役員　会長に式場隆三郎、副会長に出口林次郎、馬場太郎、理事長に高嶋冽の四氏を再選。

11人制にピリオド

昨年10月の岡山国体のとき、全国評議員会を開き、「38年の山口国体から全種目7人制とする」ことを決めた。高校男子、一般男子は11人制であったため、大きな反響を呼んだ。高体連の一部には11人制の支持者が多く、「国体の高校男子が7人制になると、インターハイは11人制だから7人制チームと11人制チームの二チームを持たねばならぬ」「11人制一本で行く」、「7人制一本で行く」との声が出た。一方学連は11月23日の会議で「春のリーグ戦、7月の全日本学生王座決定戦は11人制、秋のリーグ戦、11月の全日本学生選手権は7人制」の線を出した。このころからハンドボール界は11人制全廃——7人制の一本化の方向に傾いていた。12月からことしの1月にかけ、学連は「協会が4月から7人制の一本化をはかれば、学連もこの線に沿って協力する」と態度を表明した。協会はさらに高体連の協力を求めるため、高嶋理事長が高体連首脳部と非公式に話し合った結果、「協会の方針に協力する」との返事。これで協会は7人制に踏み切った。2月上旬豊橋で全日本実業団選手権大会のとき、桜台高の稲石監督が姿を見せ「4月から高体連は11人制をとるのか、7人制に転向するか。実をいうと困っている」と話していた。協会は評議員会を開く9日の朝の理事会で「7人制一本化」を決め、午後の評議員会に提案した。評議員会が高嶋理事長から提案理由を説明し、満場一致で可決した。ハンドボールが陸上競技の種目から独立し、11人制の第1回全日本選手権大会が開かれたのが昭和12年11月。それから数えて25年間の歴史を持った11人制が時代の流れとともに姿を消した。IHF（国際ハンドボール連盟）の加盟国34カ国のうち、11人制の実施国は西独、東独、スイス、オランダ、ポーランド、イスラエル、ハンガリー、韓国となった。

国体参加チームは72

▽…7人制実施により国体の参加チームが

協会が生れて25年

日本ハンドボール協会はことしの2月2日で創立25周年を迎えました。日本陸上競技連盟の内部種目だったハンドボールが独立して一本立ちしたのが昭和13年2月2日、協会は特に祝賀行事をせず、創立30周年（昭和43年）に記念の催しを行ないます。協会創立25年の歴史は次号に掲載する予定ですが、当時の議事録が見つかったのでとりあえずその一部をご紹介します。これは日本陸連、日本ハンドボール協会の声明書です。（共同通信、鷲尾）

声明書

今般国際送球連盟の日本代表権を日本送球協会に対し、本連盟より円満に譲渡せり、今後送球に関する一切の事は日本送球協会に一任す。右声明す。

昭和十三年二月二日

日本陸上競技連盟

声明書

今般日本陸上競技連盟より本協会に対し、国際送球連盟日本代表権を譲渡せらる。本協会は日本陸上競技連盟に対し、深甚なる謝意を表するとともに、今後同連盟の姉妹団体として緊密なる提携のもとに、送球競技の正しき普及発達に努力せんことを期す。右声明す。

昭和十三年二月二日

日本送球協会

問題となった。第17回大会（岡山）までは一般男子、高校男子の11人制をふくめ、参加チームは64チーム。「全種目7人制となっても参加人員は減らさない」という線で高嶋理事長が国体委員会と接衝を重ねてOKをとった。そこで協会は各種目の参加チーム数を一般男子32、一般女子、高校男子、高校女子を各10とし、新たに教員（男子）の部を新設（10チーム）して72チームにする意向で準備を進めていた。ところが協会関係者の一部から「教員の部は一般男子の分身と考えていい。教員の部を合わせると一般男子は32チームから一挙に40チームになる。これでは一般女子が気の毒だ」という声が出た。しかも一般女子は近年急速にチームが増え、38年度にはジューキミシン、39年以降になると三菱鉛筆、小田急百貨店、伊勢丹百貨店が名乗りをあげる状態だ。そこで理事会を開いて検討した結果、関東、東海両地区の一般男子を一チーム減し、一般女子を一チーム増やす案を作成した。これは英断である。さらに山口国体の一般男子を30チーム、新潟国体の教員を30チームと交代させる案も出て、これがすべて評議員会で可決され別表の参加チームが決まった。（東海、関東の一般女子を増やしたのは、関東地区には大崎電気、レナウン工業、38年度にジューキミシンの実業団3チーム、東海地区には愛知紡、田村紡の2チームがある。せっかく実業団チームを結成しても、社会人のスポーツ祭典である国体に出場できなくては意味がない。しかも協会が実業団チーム育成の目標を掲げているので、一般女子を優遇するのが妥当であるとの声が圧倒的に多かったためである）。

第18回国体（山口）参加チーム数

地域名	一般男子	一般女子	教員男子	高校男子	高校女子
北海道	1	1	1	1	1
東北	4	1	1	1	1
関東	6	2	1	1	1
北陸	2	2	1	1	1
東海	4	1	1	1	1
近畿	5	1	1	1	1
中国	2	1	1	1	1
四国	2	1	1	1	1
九州	3	1	1	1	1
山口	1	1	1	1	1
計	30	12	10	10	10

11人制競技の廃止に際して

高嶋列

さる二月九日の定例評議員会は、理事会原案の〃全競技を七人制で実施する〃議案を満場一致で可決した。これによって四月一日から全国どこに行っても、また男も女も、大人も子供も7人制競技を行なうことになったわけである。

協会創設いらい満二十五年、思えば長い歴史であったし、またそれはそのまま11人制競技の歴史でもあった。したがって現在日本ハンドボール界の指導的立ち場の人々は、すべて11人制で育ってきたといっても過言ではない。その幾多の先輩諸氏が、時の推移と国際情勢をよく理解され、郷愁を捨て、大改革に踏み切られたことに対して、深く敬意を表するものである。

この決定に、あるいは不満をもち、あるいはとまどう人があるかもしれない。しかしながら、矢はすでに弦を離れたのだ。われわれの目標は、世界選手権の獲得と、全国すみずみまでの普及にある。全指導者、全選手の諸君よ。世界選手権の獲得に邁進しよう。そして一人でも多くの友人を、ハンドボールのファンにしようではないか。

われわれがこの新しい試みを成功させたときに、初めて11人制を苦労して発展させた幾多の先輩諸兄に、ご恩返しができるのだ。（日本ハンドボール協会理事長）

×　　×

第19回国体（新潟）参加チーム数

地域名	一般男子	一般女子	教員男子	高校男子	高校女子
北海道	1	1	1	1	1
東北	1	1	4	1	1
関東	1	2	6	1	1
北陸	1	2	3	1	1
東海	1	1	3	1	1
近畿	1	1	5	1	1
中国	1	1	2	1	1
四国	1	1	2	1	1
九州	1	1	3	1	1
新潟	1	1	1	1	1
計	10	12	30	10	10

昭和十三年度役員

会長　平沼亮三
副会長　大谷武一
理事　塚本庸之助　浅野均一　鈴木武　杉浦卯三　山県七郎　保坂周助　池上金治　中園進　安田弘嗣　酒井将　石津誠　塩沢幹　今村嘉雄

歴代会長

初代　平沼亮三
二代　永井松三
三代　式場隆三郎

7人制一本化

その経緯と反響と将来性

昨年関東学生リーグの閉会式で、某理事があいさつの中で『来年からは全部7人制で……』と口をすべらせた。

驚いた学生たちが、方々に問い合わせたが満足な回答は得られなかった。

『いずれそうなるだろうが…』という返事ばかりだったのである。

そのときから一年もたっていない今日、7人制の全面採用が決められた。これだけから判断すると、突発的に11人制を全廃したようにも思える。

本誌前号（12号）にもあるとおり、国内の7人制一本化ムードは日ごとに盛り上がっていた。ことしの山口国体から国体を7人制に切り替えたことや、学連が今年度から秋を7人制で行なうことも決定した。7人制全面採用は、もはや時間の問題だったのである。一部の消息筋は『昭和38年4月から7人制にすることは昨年春からすでに既定の事実だった』とさえ言っている。

だから日本のハンドボール界が、ことしの4月から7人制一本化にしたところで驚くにはあたらない。

しかし、7人制一本化へのムードは急カーブをえがいて盛り上がったのも事実だ。

二年前、本誌（第4号）でハンドボール界で、国際式といったら7人制をさす日が近い。11人制はドイツ式と呼ばねば通用しなくなると書いて反響を呼んだ。

当時はまだその観測が、関係者それも首脳部のメンバーでさえも半信半疑だった。

五輪除外で推進

それからわずか二年。いやもっと短い間に7人制一本化へと傾いた。

なぜか？　理由は多い。

日本チームがヨーロッパに遠征して、まのあたりに本場での7人制の盛況を見たことも一因だ。いちばん大きな理由は、オリンピック東京大会の正式種目からはずされたことではなかろうか。

このハンドボール界にとってこの惨酷な決定は、改めて日本におけるハンドボール競技の占める位置の低さ、小ささを教えた。

「なんとかしなくては」という考え方が〝11人制を斬る〟ことであった。

というのが極言なら、7人制の持つおもしろさをもっと積極的に、前面に押し出そうというふうに換言してもよい。

7人制のおもしろさをPRして、イコール、ハンドボールの面白さをPRしようという考え方を間違っていると言う人がいるだろうか。この機を境いにして、日本のハンドボール界は次第に〝11人制が主〟から、〝7人制が主〟に移りはじめていった。

現実はそれをはっきり形で表わした。7人制専門のチームが続々と名乗りをあげたのである。

「おもしろい競技だ」と一般ファンもついてくるようになった。

将来のハンドボールは7人制で行こう。協会自体も、積極的に〝7人制〟切り替えの時期を研究し出したのである。

ヨーロッパの事情

一方ヨーロッパ各国のハンドボール界はどうだろう。ハンドボールそのものの理解は、日本とは比べものにならぬほど普及されている。しかしそれでも一つの悩みがあった。それは〝サッカーに勝てぬ〟ことである。

サッカーの異常な人気は、フィールドスポーツとしてのハンドボールの将来に、まことに大きなカベである。

ヨーロッパの関係者は、活路をインドア・スポーツとしてのハンドボールに求め、そして7人制に力を注いだ。その結果、相次いで11人制を斬ろうとする国が出てきた。もちろん11人制の魅力を捨て切れぬ国もあった。それはどの国でも多かれ少かれあることだ。折も折、1964年のオリンピック開催地に東京が決まり、その種目にハンドボールも予定された。

〝オリンピック・ハンドボール〟にとって不運だったことは、当時の国際的な情勢としては、11人制、7人制いずれとも決め兼ねていた。7人制採用が、支配的な力を持つまでにいたっていなかったことである。（このさい主催の日本の当時の情勢は全く無関係である）

死児の年令を数えるようだが、もしオリンピック東京大会の種目決定まえに国際ハンドボール連盟が7人制に踏み切っていたら――。おそらく聖火の下でハンドボールは熱戦譜をつづり得ただろう。しかし世界のハンドボール界はというより、国際ハンドボール連盟はオリンピック東京大会のハンドボールは11人制で行なうことを当然としていたのである。

だから、オリンピック種目からはずされたショックは、世界のハンドボール界をゆさぶった。特に7人制、11人制併用の国のショックは大きかった。そして『11人制では、いつまでたってもオリンピックに参加できない』ことにも気がついたのである。

いちはやく7人制一本化に踏み切ったある国の役員が、後日高嶋理事長に『オリンピック東京大会からはずされたのは残念だ。でももっと残念なのは国際ハンドボール連盟が7人制中心に切り替える機を失したからだよ』と言ったそうである。

つまりヨーロッパの一部の国では、かなり前からハンドボールは

7人制でなくてはダメだと決めてかかっていたのだ。

この観点からいえば、日本もその切り替えは決して早い方ではなかった。

こうした国際情勢も影響して日本のハンドボール界は、『ごく当然のこととして26年にわたる11人制ハンドボールの歴史を閉じ、永遠の別れを告げたのだ――。

"一本化"で安心は早い

ところで7人制に切り替えた反響はほとんど聞かない。これでハンドボールも大きく飛躍できそうだという希望的観測が強い。この一本化を歓迎しているといっていい。

バレーボール界は9人制への執着が強い。9人制だけの協会が別に生まれそうだというニュースも流れた。11人制ハンドボールに固執して、それを押し進めようという動きもないようだ。

7人制に一本化すれば日本のハンドボールは伸びるだろうか。

メジャーとまではいかなくとも、マイナースポーツの域から抜け出すことができるだろうか。

担当記者の間では『ハンドボールは7人制の方がはるかにおもしろい』、『バスケットボールよりスピーディだ』、『新しい室内スポーツとして急激に伸びるだろう』という声も聞かれる。

世間の関心を集める点では、11人制よりはるかに優った特色を持っている。

協会のいう『スピーディでおもしろい』ことがその最大の特色である。

しかし競技がおもしろいのと、試合がおもしろいのとは区別して考える必要がある。

あるOBがこう言った。「11人制が伸び悩んだのは11人制自体がつまらないからではない。日本のハンドボール技術がお粗末すぎたからだ。技術の未熟を競技自体に欠陥があるかのようにして、7人制に切替えたのでは決してプラスにはならない」。

担当記者の一人もこういうみかたをしている。『11人制のつまらなさはひとくちに言って中盤での攻防がなかったからだ。だが7人制でも日本のハンドボールは中盤でほとんど攻防戦を展開していない。7人制の特色はスピードだという。日本のハンドボールプレイヤーの持つ現在のスピードでは、7人制の真のおもしろさを発揮することはできない。』

さらにオールドファンは言う。『西ドイツやルーマニアの見せた11人制の技術は、日本の7人制よりはるかにスピーディでスリリングである。よほどプレイヤーが自覚しない限り、7人制にしても日本のハンドボール界は大きな飛躍を望めまい。』

積極的なPRを

これらの意見は、これからのハンドボール界にとって聞き流すわけにはいかない。7人制にした日本のハンドボール界が一挙に陽に当たる場所へおどり出るには、これまで以上の努力が必要である。

協会も、指導者も、プレイヤーも、もういちど7人制ハンドボールを見つめなおすべきだ。

協会はさらに7人制ハンドボールをPRしなければならない。

マスコミを通じて、7人制ハンドボールの解説に努めなければいけない。

講習会の開催、パンフレットの発行、PR映画の製作など、方法はいくらでもある。日本では7人制どころか「ハンドボール」を知らない人の方が圧倒的に多いのである。

最良の方法は、外国チームを招いて全国各地でゲームを行なうことだ。

技術の習得、PRの一石二鳥であろう。ことし一年にすべてをかけないと、7人制も11人制と同じ道を歩まねばならないだろう。

チームが増える、ファンが集まる……それだけで7人制ハンドボールが、日本のスポーツ界に進出できると思ったらとんだ思いすごしである。

（蝮谷）

◇ 協会だより ◇

日本ハンドボール協会は2月9日(土)午後1時から日本体育協会会議室で定例全国評議員会を開き、大要次の決定をみた。

1. 役員改選の結果、式場隆三郎会長、出口林次郎、馬場太郎副会長、高嶋冽理事長はともに留任。
2. 昭和38年度(昭和38年4月1日以降)から全競技をすべて7人制で行なうことに決定。具体的実施方法は次のとおりとする。
   (1) 競技は冬を除き、原則として屋外コートで実施する。
   (2) 競技場の広さは、サイドライン44メートル、ゴールライン22メートルがのぞましい。
   (3) 競技のさいには、全競技者にスパイク（革またはゴムのポイントのついたもの）の使用を禁止する。原則として運動靴（アップシューズまたはテニスシューズのようなもの）をはかなければならない。
   (4) 数日を必要とする大会のさい、雨天などにより競技実施不可能な場合は原則として順延とする。ただし雨天のさいの予備競技場として、体育館などの準備があればこの限りではない。
   (5) 全日本総合選手権大会(夏)、全日本室内総合選手権大会（冬）は予選制度を実施する。予選方法については追って発表する。
3. 各都道府県の加盟費及び各チームの登録料は、昨年と同様据え置きとする。

第１回世界学生選手権大会

スウェーデンが初優勝

日本は３敗で最下位

第一回世界学生ハンドボール選手権大会は１月１日から６日までスウェーデンのルンド市はじめ各市で開かれた。参加国は日本をはじめスウェーデン、デンマーク、スペイン、西独、ルーマニア、ノルウェーの七カ国（ブルガリアは棄権）が参加し、ＡＢゾーンに分けてリーグ戦を行なった。Ａゾーンに出場した日本はスウェーデン、デンマーク、スペインに３敗して最下位となった。決勝はスウェーデン（Ａゾーン）と西独（Ｂゾーン）との間で争われた結果、スウェーデンが14―11で西独を破り初優勝した。３位はルーマニアに決定した。

日本チームは各地を転戦したあと１月16日夜羽田着で無事帰国した。なお日本チームの国際試合の戦績は世界選手権をふくめて19戦６勝13敗である。

▽第１戦（１月１日、ルンド）

スウェーデン 26（13―3、13―12）15 日本

（評）前半気分的に上がり、あっという間に２―０とリードされた。この間２分たらず。このあとしばらくスウェーデンの攻撃を持ちこたえたが、13分ごろから１分ごとに得点されて13―３で前半を終わった。日本の得点は安達がひとりで３点。後半はやっと試合になれ、後半のみの得点をみると13―12。しかし前半の失点が最後まで響いて第１戦を失った。スウェーデンのロングシュートとスピードに完全にやられた。ゴール前のフリースローを、そのままバックシュートで得点してくるようなプレー。日本は市原の３点を除くと安達、荘林の得点はすべてサイド

（日　本）	S	得	反	（スウェーデン）	S	得	反
浅　野	9	1	5	ヨハンソン	9	6	0
安　達	17	8	4	リンドブラド	8	2	3
坂　井	0	0	5	アテリング	2	0	1
諏　訪	1	0	0	スコグルンド	1	0	3
藤　原	5	0	4	P．オルソン	6	4	1
中　根	3	0	7	バアルド	4	2	2
市　原	4	3	1	リマン	7	3	1
荘　林	5	3	4	リッカードソン	12	7	6
森　末	0	0	1	L．オルソン	3	2	3
GK　谷	0	0	0	GKサルナス	0	0	1
奥　本	0	0	0	ソールバーグ	0	0	0
	44	15	31		52	26	21

日本学生チーム遠征成績一覧表（6勝13敗）

	勝敗	月日	スコア	チーム	場所
1	●	12.16	20—26	ハンブルグ選抜	ハンブルグ
2	●	18	17—27	ブレーメン選抜	ブレーメン
3	●	22	17—19	オエルデ選抜	オエルデ
4	●	23	16—17	ベッカム選抜	ゲルセンキルヘン
5	○	24	31—15	エッセン炭礦	ゲルセンキルヘン
6	○	25	24—22	YMCA	ゲルセンキルヘン
7	○	26	14—13	ゲルセンキルヘン選抜	ウエスターフオルツ
8	●	27	17—26	全西独選抜	ノイズ
9	○	29	11— 7	スイス	オッフェンベルグ
10	●	29	5—12	オッフェンベルグ	オッフェンベルグ
11	○	29	10— 8	バーゼル	オッフェンベルグ
12	●	1. 1	15—26	スウェーデン	ルンド
13	●	2	11—34	デンマーク	ハッセルホルム
14	●	4	9—31	スペイン	ハルムスタッド
15	○	5	25—19	ルンド・マルモ連合	ルンド（スウェーデン）
16	●	8	20—34	ストックホルム選抜	ストックホルム（スウェーデン）
17	●	9	16—27	シェランド	ネストベッドホール（デンマーク）
18	●	12	21—24	カルマボイス	カルマ
19	●	14	17—27	パリ学生選抜	パリ

（世界学生選手権）

からのシュートであげた。スウェーデンにはサイドからは攻められていない。審判はドイツにくらべ、オーバーステップが甘かった。

▽第2戦（1月2日、ハスレホルム）

デンマーク 34（21―5、13―6）11 **日本**

（評）日本は前半立ち上がり2―0とリードされたが、5分荘林のシュートで2―2と追いついた。6分市原の好シュートが出て3―2と初めて逆転に成功した。10分にはまたも市原のゲットで4―3とリードしたものの、11分から17分までの間に6点を失ない9―5とリードされた。デンマークは余裕を持ってプレーをし、前半13―6とデンマークのリード。後半はデンマークの速攻で日本は完全に圧倒されてしまった。デンマークはロングシュートを多用し、これがほとんど決まっていた。市原が徐々にピッチを上げ、安達も健斗した。

（日本）	S	得	反
安達	11	2	4
浅野	5	1	3
市原	10	4	3
中根	1	0	2
藤原	12	3	5
森末	1	0	2
諏訪	1	0	1
荘林	3	1	4
坂井	0	0	3
GK奥本	0	0	0
谷	0	0	0
	44	11	27

（デンマーク）	S	得	反
レイック	13	8	8
ハカンソン	5	0	3
アンデルセン	10	4	3
ベルンド	9	8	1
バウン	6	5	3
ビグ	1	0	2
バルシュミット	1	1	1
ボービング	7	4	5
バルスコフ	5	4	2
GKウェスト	0	0	0
アーム	0	0	0
	57	34	28

▽第3戦（1月4日、ハルムスタッド）

スペイン 31（17―6、14―3）9 **日本**

（日本）	S	得	反
村田	2	0	0
浅野	5	3	6
市原	5	0	3
藤原	7	0	1
中根	5	0	3
安達	19	5	2
荘林	5	1	2
坂井	4	0	2
森末	2	0	0
GK奥本	0	0	1
谷	0	0	0
	54	9	20

（スペイン）	S	得	反
タリダ	5	0	3
アルカルデ	7	4	2
デミグエル	4	3	4
サンズ	4	3	3
ロイナズ	6	5	1
アグイリー	13	8	1
パラスコ	5	3	5
イレラ	1	1	1
ガリアナー	9	4	4
GKペリラホセ	0	0	0
マリア	0	0	0
	54	31	24

注＝戦評は省略します。

対スウェーデン戦　浅野選手のシュート

▽決勝戦

スウェーデン　14―11　西独

▽3位決定戦

ルーマニア　28―18　デンマーク

【Aゾーン】

1　スウェーデン　3勝
2　デンマーク　2勝1敗
3　スペイン　1勝2敗
4　日本　3敗

【Bゾーン】

1　西独　2勝
2　ルーマニア　1勝1敗
3　ノルウェー　2敗
4　ブルガリア（欠場）

世界選手権順位

優勝　スウェーデン
2位　西独
3位　ルーマニア
4位　デンマーク
5位　ノルウェー
6位　スペイン
7位　日本

国際試合

6勝10敗281得点

ドイツ，スイス，北欧に…………転戦

▽**第1戦**（12月16日、ハンブルグ）

ハンブルグ選抜 26（13-15，13-5）20 日本

（ハンブルグ）

	S	得	反
ウェッセル	3	2	2
メンダッハ	13	8	1
バールト	2	0	1
ペール	6	2	1
ビールツ	8	3	1
J・イーベルス	4	2	2
バルテール	0	0	0
ギルマイスター	3	1	0
P・イーベルス	3	0	0
グーデ	7	6	0
ラージ	4	2	3
GKハードビッヒ	0	0	0
	53	26	11

（日本）

	S	得	反
浅野	2	0	1
安達	23	9	4
坂井	4	0	5
諏訪	3	1	4
藤原	10	4	4
中根	7	4	1
荘林	2	0	0
村田	0	0	1
森末	2	2	2
GK 谷	0	0	0
	53	20	22

（評）学生チームとして初めての国際ゲームなので堅くなっていた。試合前のウォームミングアップが3分間しかなかった。このハンデーが肝心なところでミスとなって現われて敗れた。後半ようやく調子を出し、主に下からのシュート左から倒れ込むシュートで加点した。試合内容は第1戦としてはすばらしかった。試合当日の朝、ハンブルグ選抜チームのコーチからフォーメーションと、二、三の個人プレーの指導を受けた。

▽**第2戦**（12月18日、ブレーメン）

ブレーメン選抜 27（12-9，15-8）17 日本

（日本）

	S	得	反
浅野	10	2	3
安達	13	6	4
市原	3	1	1
諏訪	3	1	1
藤原	9	2	3
中根	7	2	1
荘林	4	2	1
大高	1	1	0
森末	2	0	0
坂井	2	0	3
GK奥本	0	0	0
谷	0	0	0
	54	17	17

注＝ブレーメンの個人テーブルなし

（評）第2戦は予想に反して大敗した。ハンブルグ選抜チームにくらべて、少し劣るように感じたが日本チームはそれ以上に出来が悪かった。日本はウォーミングアップの不足からゲームなかばで息切れしてしまった。セット・オフェンスでじっくり攻められたときはほとんどといっていいくらい防ぎ切れた。ブレーメンチームは、フリースローを直接頭の上からシュートして2点をとられた。ハンブルグでコーチを受けた動きを、実戦でやってみようとしたことが逆に中途はんぱになった。これがひとつの敗因となった。

▽**第3戦**（12月22日、オエルデ）

オエルデ選抜 19（7-10，12-7）17 日本

（オエルデ）

	S	得	反
	11	3	3
	4	0	2
	8	2	1
	12	4	0
	18	5	1
	3	0	1
	9	4	1
	3	1	1
GK	0	0	0
	68	19	10

（日本）

	S	得	反
安達	25	4	4
浅野	16	3	2
市原	5	0	0
諏訪	4	1	0
藤原	13	6	3
中根	10	1	2
田口	0	0	0
坂井	3	1	6
森末	1	1	0
GK奥本	0	0	0
谷	0	0	0
	77	17	17

（評）オエルデ選抜チームは、ハンブルグ、ブレーメン選抜チームと違い、前半からロングシュートを打ってきた。これが得点となり日本はちょっと苦しくなった。結局前半の点差が最後までたたった。オエルデ選抜チームは約3分間ストーリングをやったとき、観衆は怒り出した。日本チームは試合を重ねるごとにうまくなり、自分の欠点がよくわかるようになった。

▽**第4戦**（12月23日、ベッカム選抜）

17（10-6，7-10）16 日本

▽**第5戦**（12月24日、エッセン）

日本 31（21-6，10-9）15 エッセン炭礦

▽**第6戦**（12月25日、ゲルセンキルヘン）

日本 24（10-10，14-12）22 YMCAゲルセンキルヘン

（評）YMCAゲルセンキルヘンは若さに物をいわせるチーム。長身者がロングシュートを連発し、GK奥本は必死になってがんばった。前半8分まで接戦となり、日本が7-6と1点リードした。これを境いに一進一退をつづけ、そのままYMCAを押し切った。海外遠征2度目の勝利である。GKの谷は右腕、右足を痛めてプレーを休んでいるが、大したことはない。

（YMCA）

	S	得	反
ブラスコウスキ		2	
ハデム		0	
オセセク		2	
ホースト		1	
ナビーララ		5	
ザイカ		4	
メディング		1	
クラウゼ		7	
GKグスカ		0	
	63	22	19

（日本）

	S	得	反
安達	24	10	2
浅野	7	4	1
市原	0	0	0
諏訪	5	2	0
藤原	17	2	0
中根	8	4	1
坂井	0	0	5
大高	0	0	0
森末	0	0	0
村田	4	1	1
荘林	2	1	1
与綱	0	0	0
GK奥本	0	0	0
	67	24	11

▽**第7戦**（12月26日、ウェスターフォルツ）

日本 14（4-8，10-5）13 ゲルセンキルヘン選抜

（ゲルセン）

	S	得	反
ブレムケンパ	6	0	0
ウインテル	0	0	0
ロスベーゲル	1	0	2
ボーケル	3	0	0
グロッセ	2	0	2
プルート	5	1	0
チムメル	1	0	1
ペーリー	3	1	4
ヘッセルン	22	5	0
マドリー	6	3	4
（名前不明）	10	3	3
GKブロジオ	0	0	0
	59	13	16

（日本）

	S	得	反
安達	19	5	2
浅野	6	2	9
市原	2	0	1
諏訪	1	1	1
藤原	10	5	2
中根	4	1	5
坂井	0	0	6
森末	0	0	0
荘林	1	0	3
GK奥本	0	0	1
谷	0	0	0
	43	14	30

（評）試合前の予想は、当然ゲルセンキルヘンチームの勝利とされていた。日本チームは次第に西独チームの戦法になれ、見事ゲルセンキルヘン選抜チームを押えた。前半3分に先取点されたが、すぐ安達、中根藤原がゲットして3-1とリード。その後はいちどもリードされず前半は10-5とダブルスコア。試合はエキサイトし、息を抜くヒマもないほどだった。タイムアップ寸前に、日本の攻撃をカットされて独走を許したときは同点と思われた。しかしそ

得・失点		得点	失点
	世界学生選手権（3ゲーム）	35(11.7)	91(30.3)
	国際試合（16ゲーム）	281(17.5)	323(20.2)
	計	316(16.3)	414(21.8)

得点率		シュート	得点	率
	日本チーム 世界学生選手権（3ゲーム）	142(47.7)	35(11.7)	.264
	同 相手3チーム	163(54.3)	91(30.3)	.558
	日本チーム 遠征15ゲーム（選手権を含む）	719(47.9)	235(15.7)	.327
	相手14チーム	487(34.8)	211(15.1)	.433

（相手14チームとはブレーメン・ベッカム・エッセン・全西独・パリ学生の計5試合の記録をふくまず）（カッコ内は一試合平均）

の途中でホイッスル。14―13で強豪ゲルセンキルヘン選抜チームを破った。

▽第8戦（12月27日、
西独選抜 26（13―12，13―5）17 日本

▽第9戦（12月29日、オッフェンベルグ）
日本 11（5―3，6―4）7 スイス
（注＝12分ハーフ）

（スイス）

	S	得	反
ホルザー	1	0	1
モーゲンザーラー	3	2	2
ミラー	6	2	1
シューマン	0	0	0
ホーレンウェーガー	2	2	0
メイヤー	0	0	0
クラレー	3	1	0
ロース	0	0	0
ウールマン	1	0	0
トラクスラー	1	0	1
GKウェーバー	0	0	0
	17	7	5

（日本）

	S	得	反
安達	5	3	2
浅野	5	3	1
市原	1	0	2
諏訪	1	0	2
藤原	10	4	3
中根	3	1	1
坂井	0	0	1
森末	0	0	0
荘林	0	0	0
GK谷	0	0	0
奥本	0	0	0
	25	11	12

対スウェーデン、藤原のシュート

▽第10戦（12月29日、オッフェンベルグ）
オッフェンベルグ 12（8―2，4―3）5 日本
（注＝12分ハーフ）

（オッフェン）

	S	得	反
ガンシート	6	3	2
ゲイラー	3	1	2
ハーレル	1	0	2
ロース	8	6	3
セクザール	0	0	2
S・ベックマン	1	0	0
フリッシュ	2	0	0
フィンク	1	0	0
プラウゼ	3	1	2
ウオルナール	1	1	0
GKK・ベックマン	0	0	0
ハーベルト	0	0	0
	26	12	13

（日本）

	S	得	反
安達	7	2	0
浅野	0	0	0
森末	0	0	0
諏訪	1	0	1
藤原	3	1	0
中根	3	1	1
市原	4	1	2
坂井	1	0	0
荘林	1	0	0
GK奥本	0	0	0
谷	0	0	0
	20	5	4

▽第11戦（12月29日、オッフェンベルグ）
日本 10（7―4，3―4）8 バーゼル
（注＝12分ハーフ）

（スイス）

	S	得	反
ホルザー	2	0	0
モーゲンザーラー	4	0	0
ミラー	2	1	2
シューマン	0	0	0
ホーレンウェーガー	2	1	0
メイヤー	1	0	0
クラレー	6	4	0
ロース	0	0	0
ウールマン	0	0	1
トラクスラー	3	2	0
GKウェーバー	0	0	0
	20	8	3

（日本）

	S	得	反
安達	4	2	2
浅野	1	1	2
森末	0	0	1
諏訪	1	0	0
藤原	9	3	0
中根	1	0	4
市原	9	2	2
坂井	2	1	1
荘林	2	1	1
GK奥本	0	0	0
谷	0	0	0
	29	10	13

▽第12戦（1月5日、ルンド）
日本 25（13―9，12―10）19 ルンド・マルモ連合（スウェーデン）

（連合）

	S	得	反
ジェップソン	2	0	2
ルンドクイスト	9	5	6
マグナソン	4	2	1
T・オルソン	3	1	0
スペホグ	5	2	2
ホースマン	1	0	2
P・オルソン	4	1	2
ノード	1	0	2
リンドバル	8	8	2
GKLオルソン	0	0	0
	37	19	19

（日本）

	S	得	反
安達	7	4	5
浅野	12	3	9
坂井	0	0	2
大高	5	3	4
藤原	15	10	13
中根	5	1	6
村田	0	0	1
諏訪	9	4	2
田口	0	0	0
GK奥本	0	0	0
谷	0	0	1
	53	25	43

（評）久しぶりに勝った。連合チームはかなり強いと聞いていたが日本はベストコンディションでのぞみ快勝した。連合チームには世界選手権に出場したスウェーデンのP・オルソン、L・オルソンら5人が参加していた。このチームに勝ったのだから、日本チームも数多い遠征試合で腕が上がったといっていい。幅広く攻めたこと、少しテンポをおそくしたことが勝因。藤原がひとりで10点をあげ大活躍した。

▽第13戦（1月8日、ストックホルム）
ストックホルム選抜（スウェーデン） 34（17―13，17―7）20 日本

（日本）

	S	得	反
浅野	4	2	2
安達	15	8	8
市原	10	2	2
藤原	13	5	4
中根	4	1	3
諏訪	3	0	3
村田	3	2	3
大高	1	0	3
田口	0	0	0
GK奥本	0	0	0
谷	0	0	0
	53	20	28

（ストックホルム）

	S	得	反
K・ヨハンソン	5	4	2
B・ヨハンソン	5	5	2
ゼランダー	3	3	0
グルストロン	5	4	3
ホディン	7	4	0
ルンドバーグ	9	7	0
カールストロン	3	2	0
ヤンソン	3	2	3
シアーボム	7	3	2
GKカールソン	0	0	0
	47	34	12

（評）この試合は敗れたが、内容はよかった。全員ベストをつくして戦った。チームワークもよく。元気いっぱい走りまくった。ただつまらぬミスをして逆襲されたりポストプレーで得点されたりした。スウェーデンは日本が小さいという弱点を利用し、かならずエリア前中央のポストプレーで攻めてきた。これには全く手を焼いた。安達、藤原がよく動いた。

▽第14戦（1月9日、ネストベッド）
シェランド（デンマーク） 27（15―9，12―7）16 日本

（シェランド）

	S	得	反
E・モレルップ	10	2	3
ヤンセン	6	2	1
E・ラーセン	1	1	2
ピーターセン	4	3	0
F・ラーセン	6	3	3
ニールセン	3	3	1
ヤコブセン	11	9	1
スベンドセン	7	4	5
クラーマー	0	0	0
F・モレルプ	0	0	0
GKアレンツゼン	0	0	0
	48	27	16

（日本）

	S	得	反
安達	15	9	5
村田	1	0	6
荘林	2	0	6
諏訪	4	1	1
藤原	10	3	3
中根	3	0	5
市原	10	3	5
大高	1	0	1
田口	0	0	0
GK奥本	0	0	0
谷	0	0	0
	46	16	32

（評）試合の前に女子の試合を見た。チェコの選手権を持つチームとシェランド女子チーム戦で、幅広い厚味のある攻撃、あざやかなパックシュートにはずいぶん得るところがあった。外国チームが二チーム来るというのでネストベッドホールは満員。一挙手、一投足にわき返った。日本―シェランド戦で特に感じたのは、デンマークではインターセプトからの速攻、あるいはすばやいGKからの逆襲などに物すごい拍手が起きた。ドイツではエリア前の早いローリングに拍手があったが、この二つをくらべるとちょっと変わった感じがした。シェランド選抜チームはナショナル・プレーヤーが5人もいる強豪。ポストプレーで大半の点を取られた。プレーそのものを見ても、西独の紳士的なのに対し、デンマーク、スウェーデンはがめつい。審判が選手と話をしたり、デンマークチームのプレーに合わせて笛を吹いていた。

▽第15戦（1月12日、カルマ）
カルマボイス 24（15―9，9―12）21 日本

（日本）

	S	得	反
安達	10	4	3
市原	18	7	5
浅野	6	2	4
中根	6	2	6
藤原	12	2	6
大高	1	1	2
田口	0	0	0
与細	0	0	0
諏訪	4	3	0
GK谷	0	0	0
奥本	0	0	0
	57	21	26

▽第16戦（1月14日、パリ）
パリ学生選抜 27（16―10，11―7）17 日本

※

全日本学生チームの帰国歓迎試合は1月17日午後3時から東京台東体育館で行なわれた。

全日本学生 17（9―6，8―10）16 関東学生選抜

追いつき、追いこせ！

日本に世界征覇のチャンスはあるか

日本代表団監督 渡辺一己（関学監督）

一カ月にわたる海外遠征を終了し、無事帰国できたのはなにもまさる大きなよろこびだ。ここにその間の貴重な体験から得た数々の教訓、今後の課題などを要約し一般的報告とともに、第一回世界学生七人制室内選手権大会出場遠征チームの総評を記してみることにした。

まず団長以下全員が初の海外渡航であり、果たして無事初期の目的を遂行できるかどうか、きわめて不安に思った。しかし案ずるより生むがやすしとか。当初の予想想像、憂慮が結果的には単なる取り越し苦労に終わったのはよろこばしい限りである。これは団長以下全員の理解ある協力と、努力の賜ものと深く感謝したい。

さて欧州への第一歩となったハンブルグから始める。ここが至れりつくせりのもてなしで、それまで不安だったわれわれにゆとりをもたせてくれたのは実にありがたかった。協会関係者の紳士的な態度、細かい気の配りは、選手団に大きく自信をあたえてくれたものだ。もしこのスタートのハンブルグで、いま少し冷たい扱いを受けていたら、その後どれほどまごついていただろうと思う。おそらく帰国する日までうろうろしてしまったのではなかろうかとさえ思う。それほどハンブルグ協会の受け入れ体勢は万全だった。たとえばハンブルグ空港到着と同時に渡されたハンブルグ滞在中のスケジュールが、すべて日本語で記されていた小さな心づかい。この一つをみても親切のほどがわかっていただけよう。

試合場のふんい気も第一戦を飾るに全くふさわしい豪華なものだった。約一千五百を収容する体育館に、二千の観衆がぎっしりつめかけアリのはい出る余地もないという形容がずばりの盛大さ。ハンブルグ州警察音楽隊の体育館をゆるがすような演奏が、何曲かあったあとセレモニーにはいった。内容は形どおりのものであったにせよ、その一つ一つが初めて接する外国での試合。それも〝ハンドボールの祖国〟というべきドイツでのことだけにすべてが感激的だった。おそらく選手団の一人一人が「きてよかった。とことんまでハンドボールをつきとめてやるぞ」と、いままでにない決意を秘めた一瞬ではなかったろうか。

アップの不足から息切れ……第一戦

しかしそんな感傷もセレモニーが終わって3分とたたないうちに、試合開始となるあわただしい進行ぶりにたちまち吹き飛ばされてしまった。日本を出発する前に式場会長、高嶋理事長、中沢学連理事長、あるいは田口、佐藤（芝工大出）の両君などから随分いろいろな、そして有意義な体験談、注意を聞いてはいた。そのなかで『試合前アップの時間が全然ない』といった話は聞いたのか聞かなかったのか。それとも聞きもらしたのか、おそらく耳にしたのだろうがともかくそんな大事なことにうかつだった自分を恥じた次第だ。一人がシュートを一本打てるか打てないかのうちに、スローオフとなったのには困った。当然選手の調子はうわずってしまった。10分を過ぎるころには、アップの不足から息切れがきたりして前半はいいところなし。後半になってやっと落ち着きを取りもどし、後半は逆にリードをとる善戦をみせた。結局は前半のつまずきが最後までたたって第一戦を失った。しかし敗れたりとはいえナショナル・プレーヤーを三人もまじえたハンブルグ選抜チームに、彼らも驚くほどの戦いができたのは収穫。このときには「これならやれるぞ！」正直なところ全員がそう思った。

試合後ハンブルグ協会の要請でベンチ前に整列し「若い力」を合唱した。観衆の割れるような拍手と、床を踏みならすアンコールの要求。再び「雪山賛歌」を合唱したのも今回の遠征を通じて印象に残るシーンだった。ともかくハンブルグはあらゆるケースに体験させてくれた。しかもすべて紳士的な態度で……。重ねていうが、ハンブルグに欧州上陸第一歩を踏んでほんとうによかったと思う。欧州遠征の場合は、必ずスケジュールの一つに加えるよう進言しておきたい。「こんないい試合をしてくれるとは想像もしなかった。これで次に日本チームを迎えるときは安心だ。ハンドボールのPRにも大いに役立った」。これが試合後のハンブルグ協会役員のわれわれに対することばだったが、「もし三千を収容できる会場なら三千、五千を収容できる会場なら五千の観衆を集めることができただろう」とも付け加えた。

ついでブレーメンを経て年末までゲルセンキルヘンに落ち着いた。ブレーメン選抜チーム、ゲルセンキルヘンをベースに、オエルデ、ベッカム、ノイスに遠出して次々とそれらの土地の選抜チームと試合をした。回を重ねるにつれて、ドイツのハンドボールの底力を次第に知らされていった。ハンブルグの第一戦だけを見て、組しやすしと単純に判断したわれわれがはずかしかった。

ハンブルグではミスと逆襲で大半の失点を呼んだのだが、それからあとの試合もほとんど逆襲で失点を重ねた。「攻撃は対等近くいけるが守備で負ける。この点をどうするかだ」とは高嶋理事長、荒川日体大監督にやかましくいわれたことだ。いくらすばやい守備をとろうと思っても、それを上回るドイツ選手の鋭い出足、脚力にはどうしても及ばなかった。こちらの三歩を一歩で事足りる歩幅を持つ相手だからといえばそれまで、そこをどう克服するか。これは非常に重要かつ重大なポイントだとしみじみ思った。がっちりセットを組んだ攻防では、そう簡単に得点を許さなかったのだから、なおさら逆襲への対策は見のがせない。

目をみはる多彩なプレー……西独戦

今回の遠征で非常に大きな収獲の一つに全西独選抜チームとの対戦があった。これはゲルセンキルヘン滞在中の最後の試合。世界選手権への総仕上げとしてドイツ協会の好意で実現したものである。その強さはまさに驚異的だ。20メートル×40メートルのせまいコートで、「よくもまあこんな多彩なプレーができるものだ」と感心させられた。これが当然の姿ではないかとも考えさせられる実に貴重な体験だった。サイドのすみずみまで活用し、前後のゆさぶりも自在。ほとんど手もつけられないば

かりの戦力を見せつけられたとき正直いって弱音を吐かずにはいられなかった。単純なプレーはいっさいない。シュート一つにしても同じものは一つもない。それほど実に多彩である。ちょうどわれわれの応援にきた日本人炭坑労務者の人たちが、「あんなナメたことをしゃがって」と怒りをみせた再三の股の下からのシュート。さらにバックシュート、右サイドぎりぎりから左に倒れながらの強引なシュート。タイミングのいいロングシュートETC……。遠からず日本もかくありたいとしみじみ思った。その半面〃簡単にはいかないぞ〃と自分で自分にいい聞かせる数々のプレーでもあった。しかし、歴史、伝統、広いハンドボール層、周囲の理解度などすべての条件が〃月とスッポン〃の差。普通の努力では簡単に西独に追いつけない。といって不可能ときめつけてしまうほど、決定的なものではないと感じたことも確かだ。日本選手のすばやいプレー、外人にはまねのできない身のこなし。細かいテクニックは彼らも驚嘆していたし、生きる道はありあまるほどあるとみたい。それにこれまでの日本のハンドボールはフイールド・ハンドボールが大半で、七人制室内ハンドボールはほんのお添えもの的な存在だった。いわばフィールド・ハンドボールを、そのまま室内に持ち込んだその場限りのものだった。室内ハンドボールに一本化される日本には大いに希望が持てるというものだろう。フィールドで大きくなったプレーヤーが室内でいまほど戦えるのだから、室内に生まれ室内で大成した選手たちが、世界のひのき舞台で活躍をみせてくれる日が楽しみだ。7人制全盛の本場欧州を思うとき、日本ハンドボール界の7人制一本化はむしろ遅きに失した感さえある。ともかく長い間悩み抜いた問題が、無事解決をみたことはよろこばしい。この場を借りてその英断に敬意を表し、成功を祈る次第だ。

世界選手権では完敗……

世界選手権の第一戦は地元スウェーデン、第二戦はデンマーク、第三戦はスペイン。結果はすでにご存じのようにいずれも完敗だった。第一戦はスウェーデン（優勝チーム）に善戦した。デンマークにたたかれ、勝てると思ったスペインにも敗れた。結局は実力差。われわれの非力のありのままで弁解の余地もない。しかし技術的に特に目だったということもなかった。要するにここでも攻守への出足の差と、シュートのスピードの差があった。ただ一つ「あっ」といったのは、スウェーデンがゴール前のフリー・スローを、直接バックシュートして得点したプレーだ。いくら背たけの違いはあるとはいえ、情けないというか、相手をりっぱとほめるべきか、ちょっと形容に苦しむプレーであった。世界選手権に関しては細かい一つ一つのプレーをとらえてどうこういうより、大会の運営、大会の環境といったものに触れた方が参考になるように思う。そのことをちょっと書いてみよう。日本の諸大会のように格式張った入場式、閉会式の類はない。

大会前夜、参加全チームが一堂に会してレセプションを行なう。翌日からそれぞれが指示された時間と場所に集まって、大会を進めていくというやり方だ。それもあるときには文字どおり呉越同舟。敵味方が一つのバスに乗って一時間、あるいは二時間もかかる遠隔の試合地に出かける。日本の大会とは大変な違いだ。なぜ一つの会場、あるいはまとまった地域でやらないのか。その理由はいまもわからない。それと宿舎がわれわれの場合、スチューデント・ハウスという十階建の近代ビルデイングを当てがわれる。しかも一階から十階までてんでんばらばらに指定収容されたのにはほんとうに弱った。試合のコンディションをつくるどころか、全員が食事ごとに顔を合わせるのが精いっぱい。およそ日本では考えられない悪コンディションは泣くに泣けなかった。しかも食事には、往復一時間半もかかる場所まで行かねばならない。これではたまったものではない。零下五度から十度もある雪道を、食事を求めて一日三度行き帰りする。もうそれだけでくたくただった。今後世界の舞台に進出する日本ハンドボールにとって、技術以前にこんな条件を克服する体力と精神力、それに慣れが絶対必要だと思う。ハンドボール技術だけではおそらく世界を征服することはできないのではなかろうか。少なくとも今回の経験ではそう思った。

全体を殺さない審判……

最後に審判についてちょっと記しておこう。選手個々の技術もさることながら、本場の審判技術はさすがにどの一人をとってもりっぱだった。ともすれば字句にとらわれがちな日本に比べると、ずさんともみえる面もあるにはあった。しかしそれが全体を殺さぬ働きとなり、要所は押えている。適当にまびくべくはまびいた判定は実にうまいものだった。りっぱなプレーはりっぱな審判によっても生まれる。寸分のごまかしも許さない観衆というジャッジのジャッジがあるため、審判も自然ボヤボヤしておれなくなるのだろう。プレーだけでなく日本の審判技術という面でも、人一倍拍車をかけて追いつけ追い越せの熱意、努力が必要だと思った。僭越な言い分にあるいは諸氏の怒りを買う部分もあったかと思う。要するに道は遠いかもしれないが、望みなきにしもあらず。〃いや絶対に世界を制するチャンスあり〃というのが今回の遠征の結論だった。

最後に今回の遠征に関して多大のご指導、ご援助、ご声援をいただいた日本協会役員一同、全日本学連役員諸兄に感謝の意を表します。

日本人は根性を持て

芝工大　谷　義信

遠征前に欧州の学生チームは、クラブチームに比べてあまり強くないと聞かされていた。ところが事実はそうでなかった。プレーを見て驚いたのは、欧州の全選手がボールを完全に握ってプレーしていることである。これは日本の選手がソフトボールを扱かうようなものだ。例をあげると倒れ込みシュートや、7メートルスローのときはフロアーに接する寸前にボールを離す。つまりGKの動きをじゅうぶん見てシュートしている。これは近い将来日本でも採用しなければならない。選手の動きは日本の選手のようにきびきびしたところはない。しかし全く理論どおりに動いているため、フィールドプレイヤーは6人でありながら、それが8人も9人もでやっているような動きをする。これは日本選手と比べて体格の相違からくるものである。あの大きなからだをよく使いこなせるものだと感心した。日本人が大きいからだをしていると、動きや感が鈍いといわれがちだ。欧州ではそんなことは全然関係ない。欧州チームの共通点は、ディフェンスとオフェンスの切り替えが非常に速いことだ。これはハンドボールの鉄則であり、日本がこれをマスターするには時間を要すると思う。

優勝したスウェーデンは同じブロックで対戦したが、プレーそのものが非常に洗練されていた。特にパスワーク、キャッチなどは、他のチームに比べて目を見張るものがあった。全部のプレイヤーがどんな角度からでも、多種多様のシュートを打てるのが強味だと思う。第二位になった西独は2メートル以上の長身者がいた。フリースロー・ラインの外側からボカスカ打ってくる。またそれがゴールインするというのだから手のつけようがない。残りのプレイヤーはポストなどを使うという形式だった。印象に残ったのは第三位のルーマニアチームである。ルーマニアはスウェーデンやノルウエーなどと比較してみてもそれほど差がない。〃共産国〃というのが影響されているのだろうか、からだの作りが他のチームと違う。足腰の強さ、バネのある走力は大会随一と評しても過言でない。また勝負という執着心は試合を見ていてもはっきりわかる。ゴールエリア付近でボールをキープすると、かならず前へ突進してくる。そしてからだ全体でゴールに入れるという気持で、ファイトいっぱいのプレーをする。プレーそのものもスウェーデンに比べて一歩もヒケをとらない。むしろルーマニアの方が細かい動きができるだけ洗練されている。痛切に感じたのは強いチームになればなるほど、ディフェンスの壁が厚いことだ。これは私たちが考えていたよりも、何倍も壁が厚いのだから驚いた。いくらシュートしてもGKに届かなければ得点にならない。それを得点に結びつけたのは、欧州の選手はからだが大きいからだ。

日本はこれからも外国チームとの国際試合があるが、当分の間は体格差のハンディは残る。これは仕方がない。日本人は根性を持たなければいけない。テクニックがいいからといっても、まともに当たっては外人の力の前に屈してしまう。テクニシャンよりも、むしろ土性骨、根性の持っている選手の方が外人に通用するのではないか。レベルそのものは欧州に接近している。日本ハンドボール界も近い将来に欧州と対等、いや対等以上に戦えるときがくる。これは時間の問題だろう。

対ルントマルメ戦

巧い攻守の切り替え

日体大　藤原　侑

日本チームはすべての試合に日本人独特の小さな走り(動き)と、器用さを生かして試合をやってきた。

欧州はハンドボールの本場だけに観衆のプレーを見る目がきびしかった。日本チームの小さな動きとボール運びは、どこに行っても注目の的となり大いに好評を博した。

まず欧州チームのうまさは、攻守のタイミングが非常によかったということだ。それはディフェンスからオフェンスへの切り替え、オフェンスからディフェンスに帰るタイミングである。一見鈍いようだが、からだは柔軟性に富んでいる。外国選手の走り方を見ると

遅いように見えるが、一緒に走ると速いのには驚いた。だが走力、スタミナでは日本と互角だと思う。

日本チームと外国チームとの差について考えてみよう。外国選手はからだが大きく、しかも非常に柔軟である。手が大きいので片手でボールをつかむ。そして自由自在にボールをあやつる。そのうえスピードパスができ、キャッチミスがほとんどない。優勝チームのスウェーデン、二位の西独、三位のルーマニアから典型的なハンドボールが見られた。

だがこの体力的なハンディも、五、六年たてば日本も世界の水準に達することができると思う。このことはドイツでの強化試合のとき、ドイツ人が話をしていたし、観衆の声援からもこのように感じられた。

欧州チームの共通点はスタートダッシュの速いこと、シュートのさいボールを堅くつかみ、反則されてもゴールポストの中に飛び込んで行くことである。

最後に日本の審判と、欧州の審判の判定が異ったのには困った。外国選手から珍らしがられたシュートは、ブッシュシュート、タイミングシュートだった。

遠征15試合個人成績

	シュート	得点	率
1. 大高	9	5	.556
2. 安達	214	81	.379
3. 諏訪	41	14	.341
4. 荘林	27	9	.333
4. 森末	12	4	.333
4. 村田	6	2	.333
7. 藤原	155	50	.323
8. 浅野	88	27	.307
9. 市原	81	23	.284
10. 中根	70	18	.257
11. 坂井	16	2	.125
12. 与綱	0	0	—
計	719	235	.327

(ベッカム、エッセン、全西独、パリ学生の記録はふくまれていない。)

試合終了後のドイツ対スエーデン

旺盛な技術研究

神戸大 荘林康次

西欧ではハンドボールが完全に一般大衆にとけ込んだ最大のポピュラーなスポーツ。ハンドボールは見るためのスポーツとなっている。これにはまったくうらやましい限りである。

国内におけるハンドボールのポピュラリティーの大きさもさることながら、「彼らの高度のハンドボール技術」「彼らの心に底流するハードトレーニング中にも存在する人権尊重の理念」が加味されている。さらにハンドボール人口は日本の比ではなく、その年令層は十代から四十代にまで広がっている。

総じて、西欧学生はまず第一に学業、その余暇にスポーツをやる。練習も一週間に二日、クラブチームも同じである。私はこのわずかな練習で、世界水準を維持できるものだと不思議に思った。これは科学的、合理的な練習の賜だろう。豊富なハンドボール歴を大いに生かし、旺盛な技術研究には目を見張るものがある。過去の数多いデータを参考に、スライド盤を使用してのフォーメーション研究、それに納得いくまで選手と監督、コーチとの話し合い、すべてフランクな気持でやっている。日本のハンドボールが国際試合での不満足な戦績は、歴史的なハンディキャップよりも、むしろ指導者、選手双方の技術研究の不足にあるのではないか。体格差、体力差を口にする段階ではないように思う。

約一カ月にわたる欧州遠征で多くの好プレーを体験したが、それをそのまま日本で使用するのはおそらく不可能だ。たとえそれが使用できてもその効果はあまり期待できない。それを日本人に適応したものに改造、研究したときにその効果が強力に発揮される。このためには指導者、選手が結束しなければならない。

海外通信

▽…ヨーロッパ杯争奪室内選手権大会の西独対ポーランドの予選は昨年11月18日キールで行なわれた(観衆八千人)。ドイツ(同国室内選手権チーム、THWキール)がポーランド(同国選手権チーム、スラスク・ブレスラワを19—11(前半9—5)で破り、優勝決定戦(8チーム)出場が決まった。

▽…西独対エジプトの国際試合(室内)は11月2日西ベルリンで行なわれた(観衆五千)。西独は期待どおりの強さをみせ、19—11(前半7—4)でエジプトを破った。エジプトはいままで七回の国際試合を経験しており、いちぢるしい進歩をみせた。確実なハンドリング、基礎技術、試合運びを完全に身につけていた。現在のレベルはスペイン、ポルトガル、オランダ級である。

▽…西独ハンドボール協会は昨年11月、ドルトムントで少年ハンドボール講習会を開いた。講師は協会トレーナーのベルナル・ビック氏。参加者は国内から選抜された46人でこのうち8人はすでにナショナルチームに参加した経験者がいる。講習会は新しい練習方法、技術、戦術などである。

▽…西独ハンドボール協会はことしの夏スイスで開かれる世界選手権大会(11人制)に備えて、昨年10月末から21人の候補選手をニュールンベルグに集め冬季の個人練習、合宿などについて協議した。(以上西独ハンドボール週報から)

自己のペースにまき込め

広島商大　市原則之

欧州の学生チームやその他のチームを見て、最初のうちはうまい、すごいということだけが頭に残った。ところがだんだん見なれてくると彼らの短所が目につき、強いという感じを受けなかった。日本チームの遠征成績を考えたら、こんなりっぱなことは言えない。自分の未熟なプレーを考えたとき、外国選手を批評できないが…。ひとくちに言えば、彼らはからだが大きく、球足の早いことだけが目に映った。なかでもフリースローのとき、ポイントがそのままバックシュートで得点する驚くようなプレーがあった。これはいつもやろうと思っていてもできるものでない。バックスが気を抜いたときしか通用しない。彼らはボールを楽に握る。そしていろいろなプレーをする。日本選手もからだが大きければボールを握れるし、彼らと同等のプレーができる。彼らの短所をいちばん感じたのは、瞬間的のダッシュとジャンプシュートをしないことだ。もしも日本選手のように瞬間的なダッシュをかけ、高く飛び上がってシュートしたら、おそらくもっと強力なチームになっている。

日本チームはドイツの監督からコーチを受けた。このなかで私は一つ疑問を持った。それはドイツ人監督が「日本チームは攻撃のときの動きが早すぎる」と言ったことだ。からだの大きい外国チームのペースで試合をしたら、からだの小さい日本チームは不利になる。歩幅を例にとってもそれがよくわかる。外国人の一歩は日本人の一歩半ないし二歩に相当する。日本はそれだけ早い動きを要求されるのだ。だから日本チームは動きが早くても決して不思議はない。このことは試合によく現われる。日本チームがダッシュをかけ、機敏な動きのパスワークで早い攻撃をしたときは、スムーズに得点するチャンスができた。反対にスローテンポで攻めるとシュートチャンスがない。テンポを落とすところはやはり落とさなければいけない。日本人は日本人なりの早い動きで相手を自分のペースにまき込んでしまうことだ。ドイツ人の監督は日本人、外国人の体力の差というものを考えずに言ったのかもしれない。

それから外国選手で感心したのは、試合の状況をよく知り、実にうまい試合運びをする。試合のトラブルで退場者が出た場合、その退場選手が再びコートにはいってくるまでは絶対といっていいほどシュートしないで攻撃を続けている。こんなことはよくわかっていても、なかなか実行できないプレーである。余裕を残してプレーしている証拠であり、日本もこれを見習う必要がある。

ここでこれから日本チームが、どうすれば外国選手と対等に試合ができるか。それを考えてみる。からだの大きい外国選手を相手にした場合、外国選手が持っていない早い動きから攻撃することだ。日本独特の動き、これ以外にないと思う。「外国選手はからだが大きいから勝てない」という考えを持っていたら、日本はいつまで立っても世界を制することはできない。こんどの遠征でこう感じた人が多いと思う。

クラブチームの養成を

京大　浅野和郎

北欧のスポーツはスキー、スケート、アイスホッケーのウインタ

ースポーツ。西欧はもっともポピュラーなフットボール、それに夏はフィールド、冬はインドアで親しまれているハンドボール。西欧のスポーツはハンドボール、フットボールが人気を二分している。特にハンドボールはいつでもできるし、どこへ行っても完備したホールがあり、フットボールをリードしている。特別な地位を占めているわけだ。だからこんどの遠征は毎日を興味深く送った。私は室内ハンドボールの経験が浅い。11人制でCFをやっていたため、ディフェンスについては〃ズブのしろうと〃だったので、技術的に興味深く感じたり勉強したりした。技術面についてはほかの人が報告するだろうから、私は技術面以外のことについて報告したい。

私は国立大学の学生であり、こんどの遠征も国立大学におけるスポーツという特別の使命を感じて出発した。だから技術面以外のことがいっそう目についた。たとえば欧州では大学生をものすごくしぼるというから、トレーニングの時間をどのように解決しているかという点である。驚いたことには大学チームとしてのトレーニングは週一回が普通という。週一回のほかはクラブチームに所属してトレーニングの不足を補っている。これはクラブチームが市民の中にとけ込んでいることであり、大いに感心した。この方法がある限り、学生スポーツのプロ化はまったく考えられない。自分の意志でハンドボールを楽しみ、一方で学業や仕事に精を出している。だから欧州のハンドボールは発展こそすれ衰亡することはない。ところが日本はどうだろうか。日本のハンドボール界は学生、実業団に依存している。これがハンドボール普及の障害になっている。これは片寄った振興策といいたい。大学や高校でハンドボールをやった人が、社会人になってからハンドボールと縁を切る人が多い。これは私の想像だが日本のハンドボール人口の数倍の人々が、野球、卓球、ゴルフに転向しているのではあるまいか。野球が日本で人気のあるのは、競技自体のおもしろさのみならず、自分も心やすく草野球と称してとび込めることができる点に大きな理由があるのではないか。この点ハンドボールを7人制に切り替えたり、室内でもプレーできるのはいいことである。また新しいハンドボール層形成のために〃ハンドボール少年団〃をつくるのも政策的にはいいことである。

しかし古いハンドボール層を逃がしてはなんにもならない。クラブチームの養成こそ、ハンドボール普及の最良の策だと思う。クラブチームのためのハンドボール教室など具体的な方法はいくらでもある。欧州のクラブチーム制度の発達を目のあたりに観察して、以上のようなことをまず考えさせられた。現在の日本ハンドボール界の状況からみて、真の学生スポーツを求めるのは無理だ。個々の大学で独特の方法を発見して解決しなければならない。いま私たちが直面している諸問題（たとえば学生の練習時間、団体競技として全員がチャンスメーカーで、全員がポイントゲッターとなるべき技術面、ハンドボールの普及）はすべて関連を持ち、私たちの前に解決を待っている。

日本代表メンバー

▽団　長　棚橋義輝（中大教授）
▽監　督　渡辺一己（関学監督）
▽コーチ　勝　繁夫（立大監督）
▽選　手　谷　義信（芝浦工大）
坂井弘元（中　大）
市原則之（広島商大）
安達精太（立　大）
浅野和郎（京　大）
諏訪紀一（慶　大）
藤原　侑（日体大）
荘林康次（神　大）
大高恒貴（甲南大）
村田陽之（関　学）
森末和祐（関　学）
与縄義和（立　大）
中根敏雄（立　大）
田中敬蔵（法　大）
奥本義和（同志社）

うらやましい設備

中大　坂井弘元

欧州学生ハンドボールを見て私が痛切に感じたことは、第一にハンドボールに限らずすべてのスポーツの設備が整っていることです。各地方までりっぱな体育館がある。このような環境のなかでハンドボールを愛好している欧州学生チーム。この施設を見ただけで選手が強くなるような気がします。第二にハンドボールが非常に普及していることです。欧州ではハンドボール、サッカーなどが日本の野球に匹敵します。試合場には数千の観衆がはいります。また各地方に行っても同様です。ハンドボール人口をみても日本の野球同様に大変な数になるそうです。国際試合の前に前座試合として、少年チームの試合があるくらいですから想像がつきます。第三に体力の差です。いうまでもなく我々とは格段の差があります。私たちが想像もつかないプレーを容易にやってのけます。しかし欧州学生チームでは抜群といわれる選手は何人かに限られています。他の選手は日本の選手が訓練さえすれば手の届く範囲にいます。日本のレベルが欧州のレベルに追いつくために、私たちがきょうからやらなければならないことがあります。もちろん体力的な負担もあります欧州学生チームのようなオーソドックスなプレーを私たちがまねようとしてもそれはむりです。日本人の体力に相応した技術を身につけることだと思います。体質改善をはかり、欧州学生チームのように、オーソドックスなプレーで対抗するのも一方法だと思います。来年こそは世界の王者になるよう努力を重ねたい。そのためには黙々と実行し、いっそうの努力をしてこそ報いられるのです。「ローマは一日にして成らず」。この言葉を反省の言葉として、次の大会にすべてをつくしたい。

黄色い保安帽の応援団

＝楽書帖＝ 第13回

鴛尾武治

▽…2月9日の全国評議員会にひょっこり姿を現わしたのが大崎電気の社長の渡辺さん。「なにごとですか」と聞いたら「実はきょうの会議で、国体の一般女子の参加チームがいくつになるか心配でやってきた。わたしは第三者だから会議の中にはいることができない。こうして協会事務所の堅いイスに腰かけて決定を待っているんです。昨夜からこのことが気になっておちおち寝てもいられなかったんです」と真剣な表情。東京の女子実業団チーム生みの親ともなればこそだ。〃関東、東海地区を各二チームに決定〃の報に渡辺さんは「よかった。よかった」と手を打って大喜び。「これでますますファイトが出た。ことしはジューキミシンチームが生れるし、国体関東予選は日本最大の激戦地になっておもしろくなった」といいながら自家用車を運転して出勤(?)。

▽…全日本実業団選手権(豊橋)から拾ろう……初出場チームの多い中で、ひときわ目立ったのが地元の豊橋建設チーム。応援団がすごかった。いざ試合ともなれば、続々と保安帽に身を固めた連中がかけつけ、行儀よく並んでの応援。黄色い保安帽に作業服、応援団のリーダーは大学生の角帽に紋付きはかま。日の丸の扇子を片手にチャチャチャ。背番号11番のGK君は堂々たる体格、ちょっとした幕内力士だ。このGK君、右に左に器用に動くが、住友化学のシュートに手を焼いていた。腹の大きさは大鵬クラス、なかなかの美男子(?)で会場の人気者。豊橋建設がシュートするたびに「わあー、わあー」と声援がとぶ。実になごやかな大会だった。

▽…豊橋の会場に姿を見せた桜台高校の稲石監督。「4月から11人制がなくなるそうだが…」とあたりかまわず聞いて回る。試合はそっちのけ。「高体連も7人制支持に傾いているよ」と教えたら、とたんにシュンとしてしまった。11人制王者の桜台高にしてみればショックに違いない。「そいつは困った。どうしたらいいかわからない。あすから一年生のつもりで7人制と心中するつもりでやるより道なしだ。いまさらハンドボールをやめるわけにもいかない。11人制ならすぐ使える優秀な選手がいるが、7人制ではむりだな。本人になんと言おうかな」とさかんに頭をひねっていた。

▽…本誌12号に「ハンドボールの詩」を投稿した名古屋の塚田みつ子さんが豊橋へ来て実業団大会を観戦。石岡二高—大崎電気の選手だったが、腰を痛めて現役を退いた。「ハンドボールっていつ見てもいいものですね。なつかしいです」と言いながら大崎電気(女子)を応援していた。

時評

7人制は自分との闘い

望まれる地方行脚，記録の統一

▽…4月から11人制が姿を消し7人制一本となった。日本にハンドボール競技が移入され長い歴史を誇っていたが、やはり時代の流れにさからうことはできなかった。11人制で隆盛をきわめただけに11人制愛好者にとっては親が子を失ったと同じ気持ちだろう。CRY OVER SPILT MILK (死んだ子の年を数えるな)ではないが、この際さっぱりと11人制を捨て、7人制の発展に努力してもらいたい。7人制一本になったからには、協会自体も大いに努力してほしい。特に男子高校、大学チームに対しては、手厚い援助の手をさしのべるべきだ。いままで11人制オンリーできた。コーチ陣にしても11人制なら専門家だが、7人制については専門家とはいい切れない。高校の監督にきいても「7人制は自分との戦かいである。11人制なら目をつむっていてもいいが…」と言っているほどだ。大学にしても同じことがいえる。審判講習会、ルール研究会、指導者講習会をできるだけ多く開催して7人制の普及を徹底的にやるべきだ。予算面で苦しいことがあるかもしれない。協会の役員といえども俸給生活者である。地方へ行くとなれば制約される面も出てくる。しかしこのくらいの犠牲を払ってまでやらないと、せっかくの7人制も伸び悩むのではないか。ファンの心理をつかむためにも地方行脚が大事である。

〇…7人制に統一されたところで、ぜひ考えてもらいたいのが記録用紙。見やすく、使いやすいものをつくってほしい。また、報道各社の個人テーブルの書き方がマチマチなのも、協会の指示がアイマイだからであろう。

この機に協会としての試案を関係者に示したらどうだろうか参考までに本誌編集部では本誌13号から

【東京】
藤村 藤田 木中 藤田 辺口
佐中 伊山 鈴田 加吉 渡山 } GK

とGKを最下段にし、その他にはポジションをつけない方式に統一した。

このほかGKをFP(フィールドプレイヤー)に分ける方法もある。またルールに忠実にそのポジションによって

GK　渡
FB　辺 佐 藤 中
HB　村 伊
FW　藤 山 田 鈴 木 田 中

GK　渡
B　辺 佐 藤 中 村 伊
FW　藤 山 田 鈴 木 田 中

などの表わし方もあるが、バックスとFWはFPとしてまとめる方がよいようである。

記録保存の見地からも新シーズン開幕までに、一つの〃決定〃をみてもらいたいものである。

PARIS

ボーイング 707 ジェット機が
東京から毎日就航！
（但し月曜日を除く）

■ヨーロッパの玄関—パリ
パリはヨーロッパの政治、経済、文化の中心で、ローマ、ハンブルグと共にヨーロッパ旅行への最も便利な玄関になっています。

■パリの玄関—オルリ空港
ヨーロッパでいちばん新しく、規模の大きいオルリ空港は、その設備も極度に合理化された近代的な空港として定評があります。また空港ビルには世界で最も完備した免税ショップが開店しました。ここでは品物によっては市価の半値以下でお買物をなさることもできます。

■エール・フランスは日本人駐在員を配置
海外旅行をされる日本のお客様のためのサービスの一端としてエール・フランスではヨーロッパ各地に22名の日本人駐在員を配置しております。パリでは、オルリ空港とシャンゼリゼ営業所に日本のお客様専用のカウンターを特設し、みなさまのおいでをお待ちしております。

エール フランス

東京都千代田区日比谷三井ビル TEL (501) 6331 (代表)
大阪市東区大川町淀屋橋勧銀ビル TEL (202) 3326 (代表)
名古屋市中村区堀内町 毎日ビル502号室 TEL (54) 0540

1963年度を展望する

杉山　茂

全体的な展望

新シーズン開幕の二カ月前に協会は男子11人制の全廃を決めた。ある程度予測された事態だが、11人制と7人制ではトレーニングの方法から違う。

ほとんどのチームが11人制を主にしたチームであり、この切替えは、指導者やプレイヤーにとっては影響が大きい。

さて、7人制に統一され、国体に教職員の部が設けられたので国内の勢力分布図も変わってきた。ことにクラブ（一般男子）界は、これまでの有力チームが教職員を主力に編成されていた。この機に、実業団チームが一気に台頭することも考えられる。学生界、高校界はこれまで7人制の全国大会がなかっただけに波乱が予想される。

女子は実業団の相次ぐ誕生で、年々レベルが高くなって来ているのはよろこばしい。

おそらくことしも例年以上の活況を見せるだろう。ここで、ことしの各分野の大ざっぱな展望をしてみる。

一般男子

昨シーズンの主要大会のタイトルは、全日本と国体と全日本実業団が大崎電気(東京)、全日本室内が全日体大(東京)、全日本学生と学生王座が芝浦工大。関東学生は春が日体大、秋が芝浦工大。関西学生は春が関学、秋が同大であった。この6チームが現在日本を代表するチームであるとしても異論はない。ことに「ことしこそ四冠王……」をという大崎電気の豪華な陣容は最強の名にふさわしい。大崎をめぐる優勝争いがことしの焦点となる。

室内で大崎を倒した全日体大の伝統の地力も相当なものだ。現役の充実に若手のOB結集があればやはりその実力は最右翼である。大崎—全日体大は顔を合わせるたびに球史に残る名勝負をつづるだろう。学生、実業団を除いて、この両者に迫るチームは桜丘会（愛知)清商ク（静岡）の東海勢。大阪ク、京都クの近畿勢あたりではなかろうか。名門の桐生ク(群馬)、白亜ク(岩手)、山口ク、サンダークラブ(北海道)、福岡ク、足利球友会(栃木)、氷見ク(富山)、熊本クなどがこれに続く実力を持っている。

実業団は大崎電気を別格として住友化学菊本(愛媛)、三菱レ大竹(広島)、宗形製作所(大阪)、新三菱重工(愛知)、盛岡市役所(岩手)、丸紅飯田(大阪)、本田技研(三重)あたりがAクラスである。

教職員はもともとレベルの高い選手が多い。全日本教職員と新設の国体教職員の両タイトルを目ざして激しい争いが展開される。東日本は東京、愛知、長野、茨城。西日本は大阪、神戸（神戸ストーク)、山口、熊本あたりが強そうだ。

学生

芝浦工大、日体大（以上関東)、関学、同大(以上関西）が、ことしも東西両リーグの頂点に立つことは間違いない。大崎、全日体大と互角の勝負をし、全日本のタイトルを狙うのは、学生界ではこの四チームぐらいであろう。しかしこれを追うグループとの実力は文字どおり紙一重だ。

昨年関西で春の優勝校関学が、秋には一挙にBクラスに落ちた。関東でも春三位の法大が、秋は最下位といった状態である。これほど各校のレベルが伯仲している時代も珍しい。

関東では芝浦工大、日体大に次いで立大の復活が期待できる。昭和27、28年ごろ、全盛を誇った立大も、その後はやや低調である。

それからちょうど十年。今シーズンの成長株とし注目したい。

早、明、法、慶の4大学のなかでは早大がいちばん充実している。中大は毎シーズン期待されながら評判を裏切っていたが、ことしこそ真価を発揮してもらいたい。教大、順天堂大、東大、防大、茨城大の奮起を望みたい。

関西では、春のリーグで関学がどのような試合を見せるか興味深い。

昨秋は創部いらい最低の成績に終わっている。それだけに立ち直りがみもの。

関学は関西のヌシである。関学の低調はリーグ全体の活気をとぼしくさせる。

攻守の安定感からいえば同大が筆頭である。昨秋のメンバーから卒業が一人だけというのも有利だ。宿願の春秋優勝を果すチャンスである。全日本学生、学生王座をも手中にしたいところだ。関大、京大の古豪に対して、桃山学院大、甲南大の新進の充実も興味がある神大は評判倒れに終わるシーズンが多い。立命大と共にダークホースぶりを期待したい。二部校では

ジューキミシン誕生

4月から東京に女子実業団が誕生する。その名はジューキミシンで、大崎電気、レナウン工業に次いで三番目。これは大崎電気の渡辺社長がジューキ工業の山岡社長をくどき落としてつくったもの。監督は近藤金博君(芝浦工大出)、選手は高野（笠間高＝茨城)、青木(笠間高)、鈴木（水海道二高＝GK)、斎藤（秋田和洋女高)、山口(秋田和洋女高)、福岡（水俣高＝熊本)、佐藤（菊華高＝東京)、西村(菊華高)、能登（有磯高）の9人。大崎電気の渡辺社長は「ジューキミシンができたら、関東女子実業団リーグ戦を計画している」とジューキの誕生を歓迎している。

山岡社長も昨年12月の全日本室内選手権のとき「チームをつくります。しろうとですからよろしく」と早くも関係者にあいさつ回り。

大府大、大歯大、大経大あたりが進出しよう。
　このほか、今シーズンは関西学連全体の問題として〝打倒関東勢〟がある。
　ここ一、二年、東西の実力差がはっきりついてしまったようだ。
　7人制切替えを機に再びその差がつまり、よい意味での東西の対抗意識が激しくなってほしい。これは学生界のためにも意義のあることだ。地方勢では中京大、岐阜大(東海)、東北学院大、東北大（東北・北海道)、広島商大、山口大(中四国)、熊本商大（九州）あたりが東西のレベルに近ずいてきた。
　地方勢の進境はまことによろばしいことだ。ことに中京大、広島商大の二校は、全日本学生で優勝圏内にはいる力を持っている。地方勢のレベル向上のために、東西各校が積極的に地方校と交流するよう望んでおこう。

女子

　ことしも全国タイトルはすべて実業団の手に落ちそうだ。
　いまの実業団チームの置かれている環境もまことに恵れている。
　クラブチームは、善戦が精いっぱいである。高校チームは強チームが出現しない限り、実業団の手から優勝タイトルを奪うことはむりだ。
　なかでも愛知紡（愛知）の強さはずば抜けている。全日本6連勝、全日本実業団3連勝、全日本室内2連勝。破竹の進撃はとどまるところをしらない。
　昨秋の国体決勝で大洋デパート（熊本）に敗れたあと、選手たちは「自分たちでも負けることがあるんだな」と話していた。思いあがりでもなんでもない。その裏にかくされたすばらし気力が、この大チームのすべてなのだ。国体以後主力三人が負傷しながら全日本室内、全日本選抜に優勝、2月の全日本実業団ではすっかり元どおりになってしまった。
　男子でもこのような根性を持つ選手をそろえたチームはそうザラにはあるまい。今シーズンは久しぶりに大量の新人が加わるそうだことしも勝ち抜くことだろう。
　愛知紡の対抗は大洋デパート、大崎電気（東京）だ。
　どちらも素質のある好選手がいる。どんな試合でも力をフルに発揮することができない。
　力がありながら安定感に欠けている。それさえなくなれば全国タイトルはとれる。
　この二者に続くのは寝屋川ク（大阪)、日体大(東京)、レナウン工業(東京)、田村紡（三重）だ。
　名門寝屋川高のOGで編成する寝屋川クは、クラブチームというハンディを、相変らずの強気でカバーしているのは見事だ。クラブチームではこのほか涌谷OG（宮城)、富山女OG、北海道二ク(茨城)、梅花ク(大阪)、静岡城北ク、大谷ク(大阪)、明善ク（福岡）などの名門チーム、徳山ク(山口)、三国丘ク（大阪）などの新進も伸びてきた。
　しかし、最近のクラブチームは母校（現役）が強くても、新卒業生が実業団チームに加わると云う新しい傾向のため、クラブ自体は思うような補強ができない。しかも連日組織的な練習ができない。ことしあたりは、実業団との差が相当開いてしまいそうである。
　日体大は学生界に競争相手がなく、日女体短大(関東)、中京大(東海）の進境を望みたいところだ。

高校

　男女とも加盟校が急激に増えている。ことしは7人制に統一されたのでチームはさらに増えそうだ。
　どの地方の役員に聞いても『ことしはわかりませんよ』という。思わぬチームがとび出してきそうな気配である。一例だが、愛知県といえばここ数年、桜台高、中京商のいずれかが優勝を分け合っていたものだ。それが昨冬の新人戦では一宮高が優勝してしまった。どの地区も今シーズンは、大なり小なり、このような波乱が起きよう。
　女子の方には期待が大きい。それは実業団の手から全国タイトルを奪うのは、OGや学生チームよりも高校現役の上位チームに可能性が濃いからである。
　昨年の全日本室内決勝で、静岡城北高が愛知紡を窮地においつめた。惜しくも大魚を逸したのでもわかるように、そのレベルは非常に高い。それと実業団の誕生でプレーヤーが刺激され、レベルが上がってきていることはよろこばしい。
　高校界の詳細については、男女とも夏の全日本高校選手権の前に稿を改めることとしたい。

自衛隊

　自衛隊球界はチーム数も増し、それにつれてレベルもシーズンごとに上がってきている。
　二月の全日本実業団選手権に顔を見せた第32普通科連隊（東京＝自衛隊東部方面大会二位）は、攻守にまとまりのある好チームだった。待望の全国自衛隊大会開催の可能性も濃く、今シーズンはさらに大きな飛躍をとげるだろう。

第9回全日本総合室内選手権大会

全日体大、3度目の優勝

女子は愛知紡が2連勝

評　鴛尾武治（共同通信）
　　杉山茂（NHK）

第9回全日本総合室内ハンドボール選手権大会は昨年12月20日から23日まで東京都体育館、新宿体育館、教大体育館の三会場で行なわれた。男子準決勝で全日体大が芝浦工大の追撃を退け、大崎電気も早大に快勝した。決勝は全日体大―大崎電気となり、息づまる接戦のすえ全日体大が大崎電気の2連勝をはばみ、第7回大会に次いで3度目の優勝をかざった。女子は愛知紡―静岡城北高の間で決勝が争われた。延長戦のすえ愛知紡は青木の7メートルスローでこの試合初めてリードし、そのまま城北高の反撃を断ち切って2連勝した。

男子

▽一回戦

全教大（東京）31（13―10、18―5）15 全大宮（埼玉）
神代ク（東京）34（17―8、17―6）14 高井戸ク（東京）
徳山高（山口）31（17―6、14―4）10 日進商会（神奈川）

▽二回戦

旭桜ク（東京）18（7―8、11―2）10 慶大（東京）
立大（東京）30（17―3、13―5）8 福島大（福島）
東北学院大（宮城）18（10―4、8―5）9 霞ケ関ク（東京）
早大（東京）29（17―4、12―2）6 県工ク（石川）
浦和市高（埼玉）不戦勝 防衛大（神奈川）
徳山ク（山口）23（16―4、7―6）10 安積ク（福島）
明星ク（東京）27（10―11、17―11）22 加納高（岐阜）
全日体大（東京）32（14―6、18―3）9 日大（東京）
清商ク（静岡）31（17―3、14―2）5 自衛隊市谷（東京）
本田技研（三重）24（13―8、11―13）21 東大（東京）
大崎電気（東京）26（12―8、14―5）13 全教大（東京）
洗足ク（東京）21（11―5、10―8）13 五商ク（東京）
芝工大（東京）22（9―9、13―10）19 神代ク（東京）
滴水会（東京）26（14―2、12―3）5 自衛隊朝霞（埼玉）
日体大（東京）20（9―6、11―12）18 徳山高（山口）
芝浦ク（東京）20（13―7、7―4）11 明大（東京）

○…十九試合の結果は、いずれも順当だった。関東学生一部の慶大、明大は、ともに新メンバーだったため、攻守とも雑で、技を売物の旭桜ク（日体大OB）、芝浦ク（芝工大OB）に一方的に敗れた。地方勢では清商クが一、二回戦を通じ最高得点差の26点を記録したのが目だち、徳山高、加納高の試合も敗けたといえ注目された。特に前半日体大をリードした徳山高の善戦は賞してよい。（杉山）

▽三回戦

大崎電気 25（13―4、12―2）6 旭桜ク
立大 10（6―5、4―4）9 東北学院大
早大 28（15―6、13―2）8 洗足ク
浦和市高 13（1―1、1―1 … 5―7、6―4）13 徳山ク（抽選）
芝浦ク 19（10―6、9―8）14 日体大
全日体大 20（10―5、10―2）7 清商ク
滴水会 32（15―5、17―4）9 本田技研
芝浦工大 22（13―5、9―5）10 明星ク

○…クジ運に恵まれた浦和市高のほかは、いずれも予想されたとおりの顔触れが勝ち進んだ。好試合だったのは立大―東北学院大戦。立大は安達（旧姓小野）と中根を国際学生代表に送ったため、得点力が落ちた。東北学院大は立大をしのぐプレーをみせ、後半勝機が多かったが、試合経験の差が物を言い、惜しい試合を失った。日体大は芝浦クを押しながら、芝浦クのベテランの巧技にしてやられた。（杉山）

▽準々決勝

早大 21（11―8、10―7）15 芝浦ク

芝浦は佐藤、近藤、服部、山田、村上、尾藤の世界選手権出場者をそろえていたが、練習が不じゅうぶん。前半の失点がそのまま敗因となった。早大では長沢、森岡のプレーが光った。（鴛尾）

大崎電気 26（17―4、9―4）8 立大

立大は安達、中根を欠いて勝利はもとより望めなかったが、1分高久保のシュートで先行。その後も五分に戦って前半は善戦だったしかし大崎は一度、試合のペースを握ると、あとは目まぐるしいばかりのショートパス攻法で、立大ディフェンスを楽々と破り最後は大差となった。立大では江名の強シュートが目立った。（杉山）

全日体大 25（10―8、15―9）17 滴水会

芝浦工大の若手で固めた滴水会のがんばりも、東を中心とした全日体大には通じなかった。全日体大は、初めは慎重な試合運びだったが、点差が開くと大胆なプレーを見せて楽勝した。（杉山）

芝浦工大 36（20―4、16―3）7 浦和市高

浦和は芝浦工大の速攻にあっという間に差をつけられたが、エース加藤にボールを集め、最後まで試合を捨てずがんばったのはよかった。芝浦工大から7点をとったのはりっぱ。（鴛尾）

▽準決勝（第三日）

大崎電気 26（12―9、14―10）19 早大

大崎の勝利は順当だが、前半の早大は善戦した。長沢―平塚のコンビで大崎のディフェンスをゆさぶった。6分長沢の7メートルスローで3―2と逆転、早大バックスも大崎の猛攻をよくはばんで18分まで9―7とリードした。このころから大崎のエース竹野が調子を出して24分から28分までに4点をあげ、大崎リード。後半は大崎が優位に試合を進め、チャンスメーカー宮原（藤）の負傷退場があったが、金田の活躍で早大の追撃を断ち切った。（鴛尾）

全日体大 19（10―9、9―8）17 芝浦工大

全日体大は井上、北山の好プレーで6―3とリードすると、芝浦工大も北村、金山にボールを回して追撃した。7―7の同点から全日体は29分蓮井の切り込みで1点をリードした。後半も互いにゆずらぬ攻防をみせたが、結局攻守にまとまりをみせ、OBの東、井上を補強した全日体大が勝った。芝浦は最後までよくやった。GK谷を世界学生選手権に送り出したアナは大きかったが、青木がベストをつくし好プレーをみせた。（鴛尾）

▽3位決定戦（第四日）

芝浦工大 25（14―10、11―4）14 早大

▽決勝（第四日）

全日体大 12（8―5、4―6）11 大崎電気

力と力との対決。実に見ごたえのあるゲームだった。速攻の応しゅうでハンドボールのだいご味をじゅうぶん満喫させてくれた。大崎が竹野―宮原藤のコンビで攻めれば、日体は厚いディフェンスでがっちり食い止めた。日体が井上―小林―東のトリオで攻撃を展開すれば、大崎は田口を中心とした幅広いディフェンスで対抗した。このため前半は6―4と2点差で大崎がリードした。前半日体は14分に小林、26分に井上がポストプレーで得点したが、この2点は日体にとって〃勝てる〃自信をつけさせ

（スローオフ）全日体大　（レフェリー）岡村（教大出）

（全日体）

	S	得	反
蓮井	2	0	6
東	6	1	1
栗山	2	0	1
小林	12	6	9
北山	11	2	5
井上	9	3	3
青木	2	0	6
田上	0	0	0
GK島崎	0	0	1
	44	12	32

（大崎）

	S	得	反
村上	4	2	4
高橋	3	0	5
田口	3	2	4
金田	2	0	9
宮原藤	11	4	9
竹野	24	3	7
井上	0	0	0
宮原宏	0	0	1
GK福本	0	0	0
	47	11	39

た。後半になると日体は小林をポストにおいた。この作戦が図に当たった。小林はサウスポーである。大崎バックスは小林の右側にからだを寄せてマークすればよかったのに、左側にいたので逆効果を生んだ。リターンパスをうけた小林は、ボールを捕球すると同時にふりむきざまにシュート。しかもボールをキャッチした瞬間に右足は大きく開いた。つまりボールのくる角度に対して右足は直角になっている。したがってサウスポーの小林のシュートはからだが乗り、コントロールのいいシュートとなって現われた。それが後半の1分、10分、14分、16分に決まり、9―9（16分）の同点となった。この小林をつぶせなかったところに大崎の敗因が大きく介在している。残る13分間が勝負。18分大崎は竹野―田口とボールが回って田口が左サイドからシュートして10―9。19分には日体の井上がフリースローを一気に決めて10―10とせり合った。20分北山のゲットで日体が11―10とリード、21分30秒にも北山が7メートルスローを決めて12―10。このあと5分間は激しい攻防戦を展開したが無得点。大崎は必死になって反撃し、26分右サイドから宮原藤がシュートして1点差にした。だが大崎の攻撃が激しくなればなるほど日体のデフェンスは厚くなった。東の頭脳的なプレーは実に見事だった。29分40秒日体は幸運にも7メートルスローを得た。1点リードしているので、これをはずしてもまだ余裕がある。栗山は惜しくもこの7メートルスローを得点に結びつけられなかったが、大崎ボールになったときゲーム終了。実におもしろいゲームだった。（鶯尾）

光る静岡城北の活躍

▽一回戦

栃木女高（栃木）12（5―0 7―0）0 大垣南高（岐阜）

清水市商（静岡）14（9―5 5―4）9 梅花ク（大阪）

和洋女高（秋田）22（12―2 10―1）3 有磯高（富山）

静岡城北高（静岡）22（12―1 10―2）3 桜水商（東京）

徳山高（山口）14（9―1 5―4）5 日女体短大（東京）

菊華高（東京）9（5―2 4―4）6 明石ク（兵庫）

○…高校上位チームの充実は、すばらしかった。特に栃木女高の安定した攻守、静岡城北高のスピードある攻撃は目だった。清水市商も名門梅花クを力とスピードで押えた。（鶯尾）

▽二回戦

愛知紡（愛知）9（4―4 5―3）7 栃木女高（栃木）

レナウン工業（東京）25（12―0 13―0）0 甲子園学院（兵庫）

大崎電気（東京）18（8―4 10―1）5 清水市商（静岡）

日体大（東京）14（8―6 6―5）11 和洋女高（秋田）

静岡城北高（静岡）11（5―1 6―5）6 菊池農蚕高（熊本）

大洋デパート（熊本）19（9―1 10―2）3 菊華高（東京）

寝屋川ク（大阪）15（7―2 8―3）5 清水女高（静岡）

田村紡（三重）10（6―4 4―3）7 徳山高（山口）

○…ベスト8の内訳けは、実業団5、残り3を学生、クラブ、高校が分け合った。これはいまの勢力分布図を示したものだ。愛知紡―栃木女高は好試合だった。栃木の善戦は小林の好技によるところが多いが、前半4―0と離されながら守りを固める一方、16分以後連続ゲットして追いついたチーム力はたいしたものだ。愛知紡は持ち駒の不足から、スタミナの配分を考えたようなベンチワークを見せた。選手個々の力量がすばらしいだけに、この作戦が生かされていた。しかし、さすがの愛知紡も全盛時のようなスピードはなくなっていた。練習条件などの悪いクラブチームの中で、寝屋川クの試合展開力のうまさは印象的である。高校時代にマスターした基礎技術がしっかりしている。静岡城北高（全国高校優勝）―菊池農蚕高（国体高校優勝）の一戦は、今年度の高校女子の王座決定戦だった。城北が好調に走りまくったのに対し、菊池は調子を出し切らぬうちにズルズルと敗れてしまった感じ。田村紡は高校界でも定評のある徳山高を破り、メンバーの非凡さをあらためて認識させた。甲子園学院の非力は評判倒れ。（鶯尾・杉山）

▽女子準々決勝（第二日）

大洋デパート 10（5―4 5―4）8 寝屋川ク

愛知紡 8（3―2 5―4）6 レナウン工業

大崎電気 13（6―3 7―4）7 日体大

静岡城北高（静岡）15（7―2 8―4）6 田村紡

▽準決勝（第三日）

愛知紡 5（3―3 2―1）4 大崎電気

愛知が勝負を決めた後半の12点は、いずれも7メートルスローであげたもの。両チームとも守りが堅く、とくにゾーンがよかったのでシュートのチャンスがほとんどなかった。だが愛知はハンドリング、パスワークでいくぶん大崎にまさり、後半はほとんど大崎陣内で試合を進めた。この攻勢が7メートルスローを生む結果となった。総合力でまさる愛知紡の勝利は順当といえる。

静岡城北高 9（5―4 4―4）8 大洋デパート

城北高は若さで強豪大洋デパートを破った。大洋は開始直後徳永のシュートで先行したが、城北はチームワークがよく、林、鈴木にボールを集めてばん回し前半をリードした。大洋は勝たねばならぬという意識もあってゴール前でボールを回しすぎ、やっとフリースローでチャンスを生かしていた。タイムアップ前城北の鈴木のシュートを西村が妨害し、反則をとられて7メートルスロー。これを山口が決めて静岡は決勝に進出した。

▽3位決定戦（第四日）

大洋デパート 9（6―3 3―4）7 大崎電気

▽決勝（第四日）

愛知紡 10（3―4 5―4：1―1 1―0）9 静岡城北高

愛知紡は沢田の両足首をねんざをはじめ故障者三人を無理に出場させた。したがって動きは鈍く、愛知紡得意の速攻は力強さがなかった。これをカバーしたのが青木である。リードオフマンとなって若い城北を向こうに回した。城北は鈴木に打たせ、終始愛知紡を圧倒した。先取点は城北があげた。3分30秒纐纈のシュートはゴールポスト（左）に当たってはね返り、幸運にもゴールイン。4分こんどは愛知は右サイドから青木がアンダーシュートして1―1。このあとは取ったり取られたりして城北が4―3と1点をリードした。静岡の4点は鈴木2点、纐纈2点、愛知の3点は青木、沢田、古谷のゲットによるもの。後半鈴木がひとりで4点をあげた。愛知紡は鈴木にふり回され、手のほどこしようがなかった。1分ローリングから左にはいって、8分右サイドから、9分左へ回り込んで、17分にも左へ回り込んで得点した。これで城北は8―6と2点リードした。この間愛知は塚原、沢田、青木がゲットした。沢田は両足を引きずっての健闘をつづけた。残り時間あと3分、愛知は2点差を追いかけた。18分30秒愛知は城北纐纈のホールディングで7メートルスローを得、沢田がきれいに決めて8―7と1点差。19分30秒城北ボールをカットし、青木がノーマークで城北ゴールに殺到して同点のシュートを決め延長戦に持ち込んだ。（延長は3分30秒ハーフ）。延長前半1分15秒城北はまたも鈴木がアンダーシュートしてリード。1分50秒愛知はフリースローを沢田が決めて9―9。延長後半1分愛知は沢田が7メートルスローを失敗したが、1分30秒城北山本のプッシングが7メートルスローとなった。青木はヨーロッパ遠征でマスターした独得のフォームで決め、このゲーム初めてリードを奪った。腰をじゅうぶん落とし、腕をうしろに大きく下げ、ゴール前に倒れ込む瞬間にスナップを効かしてのシュート愛知は苦戦の連続だっただけに、この勝利は貴重なものだった。（鶯尾）

（スローオフ）愛知紡　（レフェリー）佐野（教大出）

（愛知）

	S	得	反
山崎	2	0	5
宮本	1	1	4
塚原	2	1	5
山田	1	0	0
青木	10	3	5
沢田	6	4	2
古谷	4	1	6
石川	0	0	0
則武	0	0	0
GK篠崎	0	0	0
	26	10	27

（城北）

	S	得	反
鈴木	14	7	3
纐纈	2	2	11
林	2	0	5
加藤	0	0	5
伏見	0	0	0
横山	0	0	0
山本	1	0	1
山口	1	0	0
松田	0	0	0
奥山	0	0	0
GK川崎	0	0	0
	20	9	25

全日本選抜室内選手権

愛知紡、勝負強さを発揮
男子 大崎、女子 全日体大に雪辱

新潟県協会の招待による全日本選抜室内選手権大会は、1月5日、6日の両日新潟県柏崎市の柏崎高新設体育館で開かれた。男女各3チームと地元チーム（オープン戦）が参加した。

選手権を争ったのは昨冬の全日本室内で男女各3位までに入賞したチーム。全国の最上位にある強チーム同士の熱戦が続き地元ファンを湧かせた。

その結果、男子は大崎電気（東京）が全日本室内の優勝チーム全日体大に雪辱し、女子は愛知紡（愛知）が優勝した。なお女子は全日本室内3位の大洋デパート（熊本）が不出場のため、4位の大崎電気（東京）が参加した。

※　※

▽男子第一日

大崎電気（東京）25（12－12、13－10）22 芝浦工大（東京）

両チームとも動きが鈍く、立ち上がりはほとんどシュートが決まらなかった。

しかし前半20分をすぎてからようやくスピードのある攻防を展開、一進一退をつづけた。勝負は後半なかば。大崎は18－17から竹野の好技で20－17と離し、その優位を続けて食い下がる芝浦工大をふり切った。

芝浦工大（東京）17（8－9、9－7）16 全日体大（東京）

全日体大は前半蓮井、小林が活躍して優位に立った。

しかし芝工大も住広がよく当り、1点差で後半に勝負を持ち込んだ。全日体大は攻撃がやや単調。後半20分16－13とリードしながらそのあと10分間ゲットすることが出来なかった。芝浦工大はこの虚をつき森田の連続得点などで後半26分16－16と追いついた。27分森田のシュートが決まって逆転勝ちした。

芝浦工大の現役単独チームが、室内で全日体を破ったのは久しぶりのことだ。

▽男子第二日

大崎電気（東京）26（9－7、17－10）17 全日体大（東京）

前半なかば全日体大がシュートミスを繰り返している間に、大崎は着々と加点して試合の主導権を握った。

全日体大は小林をはじめ、全員調子をくずし、15分には2－6と引き離された。ハーフタイム前から後半も竹野、田口らの強シュートを浴びて完敗した。

【男子順位】①大崎電気2戦2勝 ②芝浦工大1勝1敗 ③全日体大2戦2敗

▽女子第一日

城北高（静岡）10（3－2、7－2）4 大崎電気（東京）

前半は両軍ディフェンスの堅い守備に得点を阻まれ、後半10分までは一進一退をつづけた。

しかし城北は動きの速い攻撃で次第に大崎を圧し、最後は6点差の楽勝となった。大崎はボールの回転こそ速かったが、シュートに鋭さがなく、後半10分以後は無得点に封じられた。

▽女子第二日

愛知紡（愛知）6（1－2、3－2、2－0）4 大崎電気（東京）

大崎の気力ある攻撃で愛知紡は終始押され気味。しかもエース沢田（負傷）を欠いたため、攻撃陣がいつもより乱れ苦戦した。

後半愛知紡は勝負強い青木の好技でやっと延長に持ちこんだ。延長後は青木、宮本が積極的に打ち、青木が7分、10分にゲットしてやっと勝ち星をあげた。

大崎は攻め方がまずく、押しまくりながら愛知紡青木（5得点）一人にやられた。

愛知紡（愛知）7（4－3、3－2）5 城北高（静岡）

愛知紡は控えの持ち駒がなく、体力のロスを防ぐためにスローペース。

城北は若さにまかせて一気に攻め込むという対照的な攻撃ぶり。しかし愛知は前半試合展開力のうまさを発揮、後半も要所で青木が決めて城北をふり切った。この大会で愛知紡は、昨年末の全日本室内で沢田らが負傷し、まだ完全に立ち直っていない。このハンデーをたくみな試合のかけ引きで補い、従来のスピード攻法のほかに遅攻のコツを体得したのは収穫だった。

一部には愛知紡のスピードの無さを指摘して、そのチーム力低下をうんぬんする見方もある。だが現有勢力（部員九人）で、全日本の首位の座を保持しつづけるそのチームワークはりっぱである。

【女子順位】①愛知紡2戦2勝 ②静岡城北高1勝1敗 ③大崎電気2戦2敗

▽オープン戦

（男子）

全日体大 33（17－4、16－5）9 柏崎ク（新潟）

大崎電気 29（15－0、14－3）3 柏崎工（新潟）

芝浦工大 38（18－3、20－4）7 柿崎高（新潟）

（女子）

愛知紡 13（7－0、6－2）2 全新潟（新潟）

静岡城北高 17（7－1、10－4）5 巻高（新潟）

大崎電気 24（13－0、11－0）0 常盤高（新潟）

来年の国体開催を前に競技の普及と、この機会に一挙にハンドボール王国への足固めをしようとする地元の熱意はすばらしい。大会は大成功だった。地元チームの実力は将来性があり、新潟球界の前途は非常に明るい。

中京大 王座独占
東海学生

第六回東海学生室内選手権大会は1月26、27日の両日、愛知県岡崎市の愛知学芸大体育館で東海学連八校が参加して開かれた。中京大が予想どおり圧倒的に強く、4年連続優勝、3年連続東海学連の三タイトルを独占した。

▽Aブロック予選リーグ

岐阜大 19－12 名工大

名大 22－7 静岡大

岐阜大 21－5 静岡大

名工大 12－9 名大

岐阜大 23－10 名大

名工大 17－7 静岡大

▽Bブロック予選リーグ

中京大 23－1 南山大

愛学大 16－10 県立三重大

南山大 14－7 県立三重大

中京大 31－8 愛学大

愛学大 15－11 南山大

中京大 33－3 県立三重大

▽7位決定戦

静岡大 17－14 県立三重大

▽5位決定戦

名大 13－5 南山大

▽3位決定戦

名工大 14（8－5、6－7）12 愛知学芸大

▽優勝決定戦

中京大 31（15－7、16－6）13 岐阜大

早大が連続優勝
三大学室内リーグ

第二回早慶明三大学室内定期戦は12月8日、早大記念会堂に約二千の観衆を集めて行なわれた。早大が昨年に続き連勝した。

早大 16（8－5、8－11）16 明大

早大 18（10－8、8－5）13 慶大

明大 19（8－10、11－9）19 慶大

（順位）①早大1勝1分 ②明大2戦2分 ③慶大1敗1分

躍進を続けるミシン編機総合メーカー

本社工場全景

家庭用ミシン HW-62型

工業用ミシン DDW-122型

K-831型

東京重機工業株式会社

第3回全日本実業団選手権大会（室内）は2月3、4日の二日間、愛知県の豊橋市体育館（第一日のみ豊橋東高体育館併用）に男子16（棄権1）、女子5チームが参加して行なわれた。予想どおり男子は大崎電気（東京）、女子は愛知紡（愛知）がともに3年連続優勝を飾った。

大会は第一日に高松宮妃殿下が来場され、また地元チームの活躍などあって盛況。地元役員の大会運営もスムースで、球界の成長をはっきり示したのは収獲だった。

（試合評・鴛尾武治＝共同、宇津野良明、杉山茂＝NHK）

住友、速攻に進歩

男子

▽一回戦

大崎電気（東京）26（15−2、11−2）4 本田技研（三重）
三菱レ大竹（広島） 不戦勝 自衛隊朝霞（埼玉）
新三菱重工（愛知）19（10−10、9−5）15 丸紅飯田（大阪）
盛岡市役所（岩手）14（7−4、7−6）10 日本合成ゴム（三重）
豊橋建設（愛知）17（9−2、8−3）5 安田生命（東京）
京都市役所（京都）28（17−7、11−8）15 東芝三重（三重）
第32普通科連隊（東京）16（8−5、8−2）7 東洋レーヨン（愛知）
住友化学（愛媛）25（16−8、9−2）10 日野自動車（静岡）

○…大学出の若手OBを中心とした丸紅飯田、安田生命、静岡日野自動車などが個人技以外見るべきものがなく敗れた。盛岡市役所、新三菱重工、住友化学、豊橋建設などは、高校出の気鋭をそろえたチームでまとまりのあるプレーで進出した。

とくに盛岡市役所、豊橋建設の見せた巧妙なオフェンスは、7人制に対する研究のあとをはっきり示し、住友化学の成長も注目された。（宇津野）

▽準々決勝

大崎電気 26（14−2、12−1）3 三菱レ大竹
盛岡市役所 17（7−13、10−2）15 新三菱重工
豊橋建設 14（6−4、8−6）10 京都市役所
住友化学菊本 25（10−4、15−7）11 第32普通科連隊

○…期待された三菱レ大竹はなすところなく大崎の速攻に敗れた。三菱はディフェンスのマークが甘く、大崎はゴール前でやすやすとパスを通した。そしてほとんど正面からノーマーク同様のシュートを打って得点した。三菱の不元気はいささか期待はずれだった。盛岡―新三菱は力では新三菱が一枚上。前半単調なパスを繰り返し、盛岡のプレス気味のディフェンスにカットされるという試合のまずさ。後半の猛反撃もむなしく敗れた。盛岡がゴール前、バスケット的な攻法でチャンスを生んでいたのはうまかった。豊橋―京都は地元の大声援を受けた豊橋が、攻守ともに京都を自己のペースをまき込んだ。とくに遅攻、速攻を使い分けたオフェンスは初出場らしからぬまとまりを見せた。第四試合は第32普通科連隊がスピードのある攻撃を見せたので、点差の割に力のはいった試合となった。住友は〝室内戦法〟にくふうのあとが見え、巧妙なショートパス攻法を多用して、快勝した。（鴛尾・杉山）

▽準決勝

大崎電気 26（15−5、11−3）8 盛岡市役所

【盛岡市役所】		【大崎電気】
小笠原（盛岡商）		竹　野（日体大）
昆　　（盛岡商）		宮原藤（芝工大）
瀬　川（盛岡工）		金　田（中京商）
千　葉（学芸大）		田　口（芝工大）
佐々木（盛岡商）		高　橋（日体大）
大　渡（盛岡工）		村　上（芝工大）
栗　原（盛岡商）		井　上（新居浜工）
菅　原（盛岡工）		宮原宏（塩山高）
高橋堅（盛岡商）		坂　野（中京商）
斎　藤（明　大）	GK	福　本（芝工大）
38	ST	52
38	反則	42
4	7MT	6

○…盛岡のゴール前の攻撃は室内に対する研究のあとを見せ、ひとつのありかたを示したが大崎が相手ではその通用も限度があった。大崎は攻撃から守備へ、守備から攻撃への転換が一段と速くなった。これは金田、坂野ら若手FWの進境によるものだ。

【豊橋建設】		【住友化学】
小　石（時修館高）		北　山（坂出商）
鳥　山（時修館高）		松　井（松山工）
横　井（立　大）		中　野（小倉工）
谷　野（時修館高）		伊　藤（新居浜工）
伊　藤（立　大）		上　田（下松工）
朝　倉（時修館高）		厚　井（松山工）
藤　田（時修館高）		村　田（佐世保工）
鈴　木（時修館高）		中　村（松山工）
野　沢（時修館高）	GK	長　嶺（大淀高）
西　本（名工大）	GK	宮　崎（新居浜工）
48	ST	51
29	反則	32
4	7MT	5

住友化学菊本 25（11−7、14−8）15 豊橋建設

○…地元豊橋の応援団がこの日もスタンドからにぎやかな声援を送り、これにこたえて豊橋は張り切ったプレーを見せた。

しかし住友は『この大会で最も成長のあとを見せた（高嶋理事長の話）』チームらしくうまかった。中野の判断のよいボール回しと、伊藤、松井、北山らの多彩なシュートで攻撃に一日の長を見せた。西本、伊藤、横井らベテランの好リードで、善戦する豊橋を退けた。敗れたとはいえ豊橋の健闘は大会を盛り上がらせるにじゅうぶんだった。（杉山）

▽決勝

内容、点差はともかく、初登場の盛岡がまとまりのあるチームプレーで、ここまで進出したのは賞されていい。（杉山）

愛知紡の第一回優勝を認定

日本ハンドボール協会は昭和35年12月、広島で開かれた第一回全日本実業団選手権大会女子の部に出場を申し込んでいた愛知紡績（愛知）を、〝第一回全日本実業団女子選手権チーム〟に正式に認定したと2月4日豊橋で発表した。

高嶋理事長の話　男子と女子の回数が違うのは好ましくない。またあの時手続きでは愛知紡の出場資格が正式に認められていた。馬場副会長などとも相談して、ことしの大会から正式に優勝を認めることにした。

大崎電気 24（12－4、12－6）10 住友化学菊本

【大崎】	S	得	反
竹野	9	6	6
宮原藤	5	1	5
金田	14	9	13
田口	5	1	6
高橋	0	0	2
村上	1	0	2
井上	4	3	7
宮原宏	9	2	6
坂野	5	2	6
福本（GK）	0	0	1
計	52	24	54

【住化】	得	反	S
北山	4	2	10
松井	4	2	5
中野	5	2	4
伊藤	1	3	15
上田	3	1	1
夏井	4	0	0
村田	1	0	0
中村	0	0	0
長嶺	2	0	3
宮崎（GK）	0	0	0
計	24	10	38

3　7MT　6
主審　林（日体大出）

○…昨年の大会と同じ顔合わせだったが、住友の進境で前半15分までは動きの速い実に面白い試合を展開した。
　住友は攻撃用、守備用の選手をタイミングよく入・退場させ、攻撃に移ると中野、伊藤のベテランを中心にゴール前で小きざみに動きコンビのとれたプレーを見せた。
　しかし全体的なたくましさ、スピードでは大崎にやはりついて行けず、逆襲に転じられるとしばしばノーマークのシュートを許した。住友の守備力の問題というよりは、竹野、田口、宮原藤といった国際級選手のあざやかな直進攻撃を認めるべきだろう。
　大崎は宮原宏、金田、坂野らの若手にも積極的に打たせ、このうち金田はすばらしい突進力と強シュートで9点をたたき出す活躍を見せた。
　前半終りごろから大崎のペースとなった。住友のチームプレーが昨年に比べ長足の進歩をとげ、速攻の応しゅうからスピードとスリルに富み、7人制のだいご味を満喫させてくれた。（鴛尾）

大洋の敗因は貧攻

女子

▽予選トーナメント
大崎電気（東京）12（5－2、7－2）4 田村紡（三重）
大洋デパート（熊本）11（5－5、6－5）10 レナウン工業（東京）
▽敗者復活戦
レナウン工業 9（4－2、5－3）5 田村紡

○…愛知紡をのぞいた4チームが出場、大崎電気、レナウン工業の東京勢の成長が目だった。国体優勝の大洋はFWに鋭さが欠けレナウンに押しまくられ、後半開始5－8と差をつけられた。
　しかしその直後から見せた攻撃は大洋の本領をいかんなく発揮、あっという間に6点を連取し11－8と逆転。食い下がるレナウンを1点差に押えた。
　昨夏の全日本初出場いらい、注目の的となっている田村紡はやはり体格のハンディが大きくひびいた。種村を軸にすばらしい動きを見せるのだが、勝利を得るまでにはいたらなかった。
　今シーズンの経験を生かして、ますますの精進をこの少女チームに期待したい。（杉山）

【大崎電気】	【熊本大洋】
早川（半田高）	西村（熊本市高）
宇井（栃木女）	千原（京都女高）
黒川（静岡城北）	久連松（熊本市高）
早乙女（栃木女）	徳永（熊本市高）
笠原（水海道二）	立山（菊池農蚕）
田村（水海道二）	桜木（菊池農蚕）
深津（栃木女）	安藤（菊池農蚕）
白石（新居浜東）	
GK 古谷（水海道二）	GK 徳富（熊本市高）、木原
30 ST	32 ST
41 反則	21 反則
4 7MT	2 7MT

▽準決勝
大崎電気 9（5－2、4－3）5 大洋デパート

○…大崎は大洋の一線（直線）防御を、早川、田村の両ロングシューターが打ちくずし打倒大洋の宿願を果した。
　大洋の敗因は防御の失敗というより、その貧攻にあった。エース西村に精彩がなく、他の選手の動きも鈍かった。
　後半ミドルシュートで点差をつめたが、試合のペースを奪い返すまでにはいたらなかった。
　大崎は宇井が判断のよいボール回しと切込みで早川、田村を生かしていたのが光った。早川の動きのよさも大いに目だった。（宇津野）

愛知紡 12（4－1、8－1）2 レナウン

【愛知紡】	【レナウン】
古谷（半田高）	竹本（有磯高）
沢田（半田高）	太田（和洋女）
青木（半田高）	鈴木孝（栃木女）
塚原（水海道二）	渡辺（水海道二）
山田（稲沢高）	斎藤（栃木女）
宮本（水海道二）	風岡（富士宮東）
山崎（半田高）	椎名（太田二）
	鈴木雅（栃木女）
GK 篠崎（栃木女）	GK 山田（日体大）、柿沼（栃木女）
36 ST	29 ST
28 反則	29 反則
3 7MT	2 7MT

○…塩川レナウン監督は試合前、勝算じゅうぶんありと自信にあふれていた。前半は接戦だった。ここ一発というときに愛知紡はさすがに勝負強い。守っても落ち着きあるプレーで、レナウンに1点を許しただけ。レナウンはよく動きながらタテの変化にとぼしく、愛知紡のディフェンスをくずせなかった。後半は愛知紡が走りまくって一方的にレナウンを押えた。攻守に進境を見せたレナウンも、まだまだ愛知紡とは差があるようだ。（杉山）

▽決勝
愛知紡 13（9－4、4－4）8 大崎電気

【愛紡】	S	得	反
沢田	3	3	4
青木	7	5	6
古谷	7	2	9
山崎	0	0	5
塚原	6	3	3
宮本	0	0	3
山田	0	0	0
篠崎（GK）	0	0	0
計	23	13	30

【大崎】	S	得	反
田村	12	3	3
早川	5	2	9
早乙女	0	0	2
白石	7	3	3
宇井	1	0	3
黒川	0	0	3
深津	0	0	1
笠原	1	0	6
古谷（GK）	0	0	0
西（GK）	0	0	0
計	26	8	30

5　7MT　5
主審　浅野（日体大出）

○…大崎は早川の動きを愛知紡のディフェンスに封じられた。このためすっかり攻撃の調子を狂わせ、わずかに白石、田村のロングシュートで散発的に得点したにすぎなかった。
　愛知紡は対照的に、復調した青木、沢田のコンビを軸にフォーメーションプレーがあざやかに実った。これが古谷、塚原らが好シュートを生んだ。
　開始早々に、大崎がミスパスを繰り返している間に、青木がすばやく連続点をあげ3－1とリード。これが大崎のあせりをさそうに役立った。
　大崎は後半7メートルスローで点差のつまるケースもあった。しかしGK篠崎の好守にはばまれてしまった。
　愛知紡は岡山国体で大洋に敗れていらい、調子が狂っていただけに会心の勝利といえる。（杉山）

体育研究室

ハンドボール選手の体力 ③

——全身反応時間について——

山本隆久

全身反応時間と敏捷性

反応時間（Reaction Time）は、身体が外部から何等かの刺戟を受けた場合に、その刺戟に対応する筋肉が活動を開始するまでの時間である。外部からの刺戟は大脳に伝えられ、刺戟に対応する活動を起させるために、大脳からの命令が運動神経等により筋肉に伝えられ、筋肉が収縮して活動が開始されるのである。

反応時間の測定には音（ベルやブザー等）や、光（豆電球の点滅）の刺戟により、予らかじめ定められた運動を、手又は脚等の身体の一部位によって行ない、刺戟が与えられる時から運動をおこす迄の時間をカイモグラフ（回転円筒）又は、クロノスコープによって測定している。

これらの測定によって得た数値は、一応敏捷性（いわゆる〝すばやい動き〟を表らわしていると考えられる。競技において〝どうしたらよいか〟〝何をするべきか〟〝次の場面でどの様な事がおこるか〟等と考えている暇はなく、とっさに行動に移らねばならない。

味方のパスが、いつ、どの様な速さで、どの方向に、どれ位投げられるか瞬間的に判断して行動をおこしたり、相手のガードをはずしたり、又、逆に相手をガードする瞬間的な動作の遅速は、基本技術や、体力の他の要素と共に選手としての資格を決定する重要な要因の一つである。

しかしながら、身体の一部位の動きの速さのみで以て、全身を動かす様なスポーツ選手の全てを判断することは早計であろう。アメリカのキュアトン氏は、運動競技においては前述の様な反応時間よりも、全身を動かす様な反応時間（すなわち全身反応時間—Whole Body Reaction Time）の方がより競技に関係が深いとして種々な被検者に実験を行なっている。端的にいうと全身反応時間とは、刺戟に対して全身を動かす活動を行なう反応時間である。日本においても最近東京大学教育学部体育研究室において全身反応時間の研究が進められており、単純な動作の全身反応時間から、スポーツ特にボールゲームズに応用できる様な関連の深い全身反応時間の研究が為されると考えられる。

選手の体力を測定するに当って前述の様な理由から、今回は全身反応時間を測定した。

測定の方法

用具は東京大学教育学部体育研究室で考案された測定器でストレインゲージの組みこまれた跳躍台、抵抗器、増幅器、記録器から成っており、跳躍台上にて、全身を動かす動作（跳躍）を行なった時、その動きの時期が跳躍のために加えられたひずみの変化としてストレインゲージにより測定され記録される。

男子選手について

△測定年月日及び場所　昭和三七年四月二二日東京大学教養学部

△被検校及び被検者　大学一部校芝浦工大（一三名）、日体大（一二名）、二部校順天堂大（八名）、東大（一四名）

△測定方法　ハンドボール競技の性格から唯単に垂直に全身を持ちあげる動作でなく、身体を横へ移動させる動作を行なわせた。記録は次の様にして読まれる。

記録紙に表われた曲線

跳躍台　右　中央　左

タイムシグナル　0.1 sec

この図は跳躍台から刺戟により左の方へ移動した時に表らわれてくる模式図である。最初中央に立って刺戟が与えられると（0点）しばらく経って表面に動作が表らわれ、その動きが記録される（A点）片脚が台からはなれた時がB点で、C点は左の跳躍台へ片脚がついた時である。中央の跳躍台から両脚が完全にはなれた時がD点になる。

△測定成績について

今回は全身反応時間の中でも

0B…刺戟を受けてから片脚がはなれるまで

0C…戟を受けてから片脚がどちらかの跳躍台につくまで

の二つの時間について考察してみた。測定成績は第1表の通りである。

第1表

測定分区＼チーム別	一部校	二部校	W-up後
0 B	〇・二七三	〇・二七八	〇・二八八
0 C	〇・五四六	〇・五五七	〇・五四三

この結果を考察してみると。

一、一部校と二部校との間には殆んど差がみられない。強いていえば、0Cつまり片脚が右か左の台につくまでの時間に多少の差がみられる。この事は神経系統の伝播の早さでなくむしろ筋力に影響しているのではないかと思われる。〝ハンドボールNo.10ハンドボール選手の体力〟で、一部校の方が二部校より筋力（これは右上腕の屈筋力であるが）が優っていたことと合致するものである。

二、W-up後では神経系統の伝播の早さが一様におそくなるのに比べて、筋肉の動きが早くなっている。（W-upは各選手に約五分間位でベストコンディションにする様にと指示して行なわせたもので、その内容は夫々選手によって異なっている。）この事はW-upに問題があるのか、或は又、ベストコンディションというものに夫々差異があって、一様でない為におこるものか不明であるが、W-upが筋肉関係に重点がおかれている状態は十分に観察される。

女子選手について

△測定年月日及び場所　昭和三七

年六月一三日国立競技場

△被検者　全日本女子チーム（一五名）、日本女子体育短期大学ハンドボール部員（一三名）、東京大学教養学部女子学生（一三名）

△測定方法　男子選手と異なり、垂直に全身を持ちあげる運動を二種類行なった。記録は次の様にして読まれる。

Iの方法は直立の姿勢から出来るだけ早く台から両脚をはなす動作を行ない、IIの方法は直立の姿勢から出来るだけ早く、しかも出来るだけ高く跳躍したものである。I、IIの方法とも

0A：刺戟を受けて運動がはじまるまで

0B：刺戟を受けて運動が終了する。すなわち両脚が完全に台からはなれるまでである。

△測定成績について

測定成績は第2表の通りである。

第2表

	チーム別	I GK	I FP	I 全	II GK	II FP	II 全
0A	全日本女子チーム	〇・一九	〇・一九	〇・一九	〇・一八	〇・一八	〇・一八
	日本女子体育短大ハンドボール部	〇・二六	〇・二三	〇・二三	〇・二七	〇・二三	〇・二三
	東京大学女子学生	／	／	〇・二四	／	／	〇・二四
AB	全日本女子チーム	〇・一五	〇・一九	〇・一九	〇・三五	〇・三三	〇・三三
	日本女子体育短大ハンドボール部	〇・二一	〇・一七	〇・一七	〇・三五	〇・三八	〇・三八
	東京大学女子学生	／	／	〇・二一	／	／	〇・四五
0B	全日本女子チーム	〇・三四	〇・三八	〇・三八	〇・四三	〇・五〇	〇・四一
	日本女子体育短大ハンドボール部	〇・四七	〇・三九	〇・三九	〇・五二	〇・五九	〇・五九
	東京大学女子学生	／	／	〇・四五	／	／	〇・七〇

この成績から判断できることは

一、殆んどの項目で全日本チーム特にGKが最もすぐれた成績を示している。この事は、0Aつまり刺戟をうけて運動がはじめられるまでの神経系統の働らきが敏速に行なわれており、しかもAB運動を行なっている筋肉の動きも、早い（いいかえれば強い）ことを示している。

二、一般学生に比べれば、ハンドボール選手は神経系統も筋肉の動きもすぐれていることがわかる。

総体的に反応時間と反射時間は異なるものであるが訓練の如何によっては、反応時間を反射時間の近くにまで短縮できることは種々な実験により立証されている。

吉田章信氏はその運動生理学で練習によって反応時間が短縮することを発表している。しかし、それは反応時間に要するどの部分で短縮されたのが不明であるが、ストレインゲージを用いた全身反応時間の測定では、完全なものとはいえないが、略々推定することができる。

すなわち、刺戟を受けて運動（というよりも筋肉が表面に表われない活動をする）がはじめられるまでの神経系統の早さと、筋肉自体の動きの早さとを分けて測定することができる。従って、個人の成績から、トレーニングの方法に一つの示唆を与えることができる。

同一の反応時間（男子では0D、女子では0B）を有する選手間でも、トレーニングを行なう場合に神経系統の早さを早める様なトレーニングを重点的に実施した方がよいか、或る筋力を高める様なトレーニングを課した方がよいかが判明する。

体力増強と反応時間

体力増強の必要性については、〃ハンドボール、No. 10, No. 12 ハンドボール選手の体力〃にて強調した。運動能力、筋力、機能の増強については具体的な方法が種々開発されているが、反応時間、特に神経系統のトレーニング方法は重要であるにもかかわらず非常に困難であり技術そのものの練習より外に今の所良い手段がない。この事は筋力等の増強と共に、ボールから全然はなれた状態がない様にする練習のスケジュールが必要となってくるゆえんである。体力と技術、この両面が完全に修得し得る様な練習をチーム全体で又、監督は勿論のこと、選手一人一人が心して検討、実施しなければならない。

測定結果のまとめが大変おくれました事を御詫びすると共に、御協力頂いた被検者の皆さん関係者並びに東京大学教養学部山口晃氏、教育学部石井喜八氏　小山貴氏、芝浦工大三浦睦夫氏、佐々木明男氏、吉武敦麿氏、東京教育大学、日本女子体育短期大学のハンドボール部員、御指導頂いたトレーニング・ドクター広田公一先生に感謝致します。

参考文献

全身反応時間の研究とその応用　猪飼道夫他，オリンピヤ7号　p. 18
運動生理学　吉田章信　p.510
Physical Fitness of Champion Athletes　T.K. Cureton　p. 94

ルールの改正と解説

昭和38年4月1日から実施する競技規則の改正点は次のとおりである。

1.　競技概念

7人制ハンドボールの「7人制」を削除して、「ハンドボール」とする。

したがって11人制の競技規則を全部廃止する。今後「11人制」「7人制」の字句を廃止して、「ハンドボール」と呼ぶ。

2.　競技競則

（3ノ1）　1チームは11名の競技者から構成される。

本文の「一チームは10の競技者からなる。（………）。国際競技の場合は」を削除。（注）の「日本においては、国際競技人員（……）を採用する」を削除。

（3ノ3）　競技者はいつでも競技に出場または退場することができる。

本文の「交代」することができるを「退場」と訂正し、出入場と交代の項を明確にした。

（3ノ4）（注）『ただしゴールキーパーが退場させられた場合は、1名のフィールドプレイヤーを退場させ、もう1人のゴールキーパーを入れる』をあらたに追加。

チームの構成の中に2名のゴールキーパーがいるので、1名が退場させられたら他のキーパーが出場する。（改正点の重要部分である）。

（3ノ6）（注）　参加する者および交代させられる者は、センターライン附近から速やかに行なう。ゴールキーパーも同じ。

全競技者の出入場の場所は、センターライン附近と改正した。（改正点の重要部分である）。

（3ノ8）　靴は極く軽い靴だけ着用することができる。

本文の「戸外での競技には、革またはゴム製の横材または鋲をつけてもよい……」を削除。室の内外をとわずスパイクが禁止された。

（17ノ6）　主責任者を2分間、更に繰り返して行なわれた場合は5分間退場させる。ボールを下においている場合も同じ取り扱いを受ける。

退場時間が段階的になったので、いままで以上に退場のケースは増加してくるものと思われる。

（17ノ10）　(注)を全文削除。

（17ノ11）　レフェリーは次の場合、ホイッスルを吹く。

(A)　競技開始時。ハーフタイム。競技終了時。

ハーフタイムも競技終了時にタイムキーパーはホイッスルで合図をする。競技はレフェリーのホイッスルによって終了することになった。（改正の重要部分）

（17ノ11）　(注)を全文を削除。

（17ノ12）　(注)に、「タイムキーパーは競技者の不正交代、不正出入場時には合図を行なう」を追加。

競技者の不正交代、不正出入場の監視をタイムキーパーが行なう。（改正の重要部分）

（17ノ15）　(注)のゴールジャッジあるいはラインズマンの指示は旗だけで行なう。この部分を削除する。

本文にそれぞれの方法が記されているので重複するので削除した。

技術研究室

7人制の技術的考察（第五回）

担当 松本重雄

ことしの4月1日から7人制一本となった。この機会に7人制についての考え方をまとめてみた。

◎競技の全般的な考え方

イ、競技者すべてが競技をする。つまり攻防に休む余裕が少ないこと。

ロ、競技者は攻防共通している。オールランドプレーヤーが必要条件であること。

ハ、速攻、遅行が割り合いはっきりしていること。そのミックスと、切換えのタイミングをつかむ必要があること。

ニ、中盤も時によって攻防に含まれること。つまり中盤戦の妙味があること。

ホ、メンバーチェンジによる切換え、作戦的変化などを必要とすること。

ヘ、ルールの理解とチームワーク（特に攻防のコンビネーションを必要とすること。

ト、個々のプレーの確立、複雑な企画による作戦などを必要とすること。

大崎電気竹野選手にコーチする筆者

◎競技者の技術

1 全般的なもの

○身体の柔軟性を必要とする。あらゆるスタイルからパス、シュート、動き、切り込みに柔軟性を必要とする。

○複雑なプレーを必要とすること

○ボールをつかむ必要があること初歩時代からボールを、手に（片手）握ることがのぞましい。

○巧緻性を必要とすること。

○敏捷性を必要とすること。

○走力、投力、跳力を養うこと。

○スタミナをつけること。

○スタミナの配分を考えること。

○体格（特に身長）からくる重圧感をもつこと。

○いわゆる勘のよさを養うこと。スピード感が特に要求されるため、その中にあってひらめきの速い、好判断、その場の構造を支配する能力を養うこと。

○ファイトと強固な意志の養成。

○オフェンス即ディフェンスであること。その逆もまた真であること。つまり速攻の攻防をつねに考えること。

○攻防のフォーメーションを必ず持つこと。作戦的動きのないことは、決して勝利も進歩もあり得ないこと。

○攻防において、各プレーヤーの持ち味を善用すること。

（攻撃） ロングシューター。ボールの配給者。ポストプレーヤー。切り込みの巧者。サイド攻撃巧者。オトリ的攻撃者。ブロッキング巧者。

（防禦） 身長に恵まれたもの。カット巧者、キーパーの壁として、コンビネーション巧者。

○ドリブルの多用を避けること。

○速攻は原則としてクロスプレーをする必要がないこと。（直線的攻撃）。

○速攻の防禦は原則として、ボールに関係なく帰陣すること。

○シュートは上下以外、左右にジャンプ（倒れとび）する必要があること。

○倒れ込みの安全性を訓練すること。

○キーパーの安全性を備えること

（身体的予防）。

○キーパーは足さばきを身につけること。

2　練　習

○走力について

瞬間的ダッシュの練習を特に必要とする。腰高でもいいから速く走る陸上競技形も考えに入れるべきであること。長距離走、インターバル走法によるスタミナの養成。スタミナの配分。サーキットトレーニングによるスタミナの発展充実を計りたい。

○投力について

つかんで投げる技術。両手の速いパス（チェストパス）。クイックモーションパス。バックパス。手渡しパス。変化に豊んだ技術を必要とする。

○跳力について

走ることもやや腰高も要求されるが、腰、膝のバネを養成すること。

以上のことから例として（サーキット的訓練を含む）あげてみた。

一列縦隊ジョッキング

前転　イス　後転　ダッシュ各種　ターン各種　スタート各種　側転（腕立て）　左　右　蛇行　ダッシュ　片足ジャンプ　片足ジャンプ

○パスの練習、カットの縁習（基礎型）

4m　4m

○オフェンス——→パス

▲ディフェンス——→カット

オフェンスは50cmの円からなるべく出ない。パスを各種三方に送る。

ディフェンスはボールに一人必ずあたりその他の者に一方的にコンビネーションを作らせる

従来の三角形より多角的パス、カットの練習に役立つ。

世界マラソン界の王者　寺沢君はハンドボール選手

▽…ことしの2月17日別府市で行なわれた毎日別府マラソンで寺沢徹君（倉レ大阪）が2時間15分15秒8の世界最高記録で優勝した。この記録はいままでの世界最高記録保持者アベベ選手（エチオピア）の記録を破るもので、文字どおり世界NO1。

▽…この寺沢君はなんとハボンドール出身者、高岡商高（富山）時代はハンドボールプレーヤーとして大活躍。昨年の朝日国際マラソンで優勝したとき、朝日新聞紙上に寺沢君の話しが掲載された。「高校時代ハンドボールをやっていたあのときはよく走った。これがよかったのです」。

▽…来年10月の東京オリンピック大会をめざして毎日二十キロ、一カ月六百キロを目標に走っている。ベルリンオリンピックで鳴らした村社講平氏のコーチで練習にはげんではる。

▽…相撲社会にもハンドボール出身者がいる。それは幕内の岡ノ山（時津風部屋、岡山県出身）で、中学時代大いに活躍した。

○準備体操

○連続して行なうトレーニング

①一列縦隊ジョッキング

②ジャンプ（片足）

③蛇行

④インターバルダッシュ

⑤一列横隊ジョッキング

⑥バックターン

⑦横転（腕立て）

⑧前転、後転

⑨スタート（スタンディング、後むき、坐った姿勢、寝た姿勢）（上図参考）

○十本パスゲーム

○人員5人一チーム。一チーム。

○味方同志三人以上の手を経て10回パスをしたチームを勝とする（リターンパスはやってもよいが回数に数えない。）

○マンツウマンを原則とすること

○コートは7人制の半分位、或はバスケットコート位、とする。

○反則はすべて相手チームのフリースローとする。

○スローインもある。

○時間は3分とし、（これは勝敗の決しないとき）勝敗の決したときと、決しないで3分たったときは、30秒〜1分の休けいをとること。

○開始はレフリースローから行なう。

○フリーパス（シュートを含む）

試合前。練習の攻防戦前。各自がジョッキング、ダッシュ、各種パス、をおりまぜて行う。切込みによるシュートを含む動きもよい。人員は6名程度とし、声をかけコンビの流通と、準備運動として行う。

キーパーの技術について次号に特別寄稿をお願いしてある。

連載第四回

ハンドボール球史

関東選手権と関西選手権

関東選手権

▽第一回と第二回の準決勝までは本誌12号に掲載

▽**第二回**（昭和13年6月12〜13日 体育研究所）

（決勝）
明　大 7（3−2、4−3）5 日体A

▽**第三回**（昭和14年6月8日、神宮）

（一回戦）
早　大 5−3 日体B
慶　大 11−3 浦和高
YMCA 8−3 文理大A
日体A 20−1 文理大B

（準決勝）
慶　大 8−3 早　大
日体A 10−3 YMCA

（決勝）
日体A 14（5−1、9−3）4 慶　大

▽**第四回**（昭和15年6月22日、芝公園）

（一回戦）
慶大A 12−1 早大B
日　体 27−2 慶大B
早大A 17−6 法　大
東京ク 14−6 文理大

（準決勝）
日　体 12−5 慶大A
早大A 19−4 東京ク

（決勝）
日　体 7（3−2、4−1）3 早大A

▽**第五回**（昭和16年6月12−15日 青山師範）

（一回戦）
早大B 12−0 文理大
法　大 15−3 東京ク
日体B 2−1 明　大

（準々決勝）
日体OB 6−0 青山師クラブ
日体A 13−0 日体B
慶　大 6−1 早大A
早　大B 10−0 法　大

（準決勝）
早大B 5−1 日体OB
日体A 4−0 慶　大

（決勝）
早大B 7（4−4、3−2）6 日体A

▽**第六回**（昭和17年6月13、14、20日、日体、神宮）

（一回戦）
青山師クラブ 9−0 法大B
慶大A 9−2 早大B
早大A 9−0 法　大
駿台ク 不戦勝 文理大

（準々決勝）
日体ク 25−0 青山師クラブ
慶大A 15−2 東京ク
早大A 5−0 慶大B
日　体 11−9 駿台ク

（準決勝）
慶大A 2−1 日体ク
早大A 8−2 日　体

（決勝）
慶大A 7−2 早大A

▽**第七回**（昭和18年7月3、4日、日吉、神宮）

（一回戦）
慶　大 5−1 東京一師
全明大 不戦勝 大正ク
日体ク 16−1 全法大
早　大 7−1 東京ク

（準決勝）
慶　大 4−3 全明大
日体ク 4−2 早　大

（決勝）
慶　大 1（0−0、1−0）1 日体ク

（関東選手権完）

関西選手権大会

▽**第一回**（昭和16年12月28〜29日 甲子園）

「決勝」

（一般男子）
大阪ク 2（1−1、0−0、1−1）2 関西稲門
引き分け

（男子中学）
豊中中 4（3−2、1−0）2 北野中

（一般女子）
梅花高女 3（1−1、2−0）1 津山高女

▽**第二回**（昭和17年8月28、30日 甲子園）

（男子中学）
「準決勝」
豊中中 10−0 生野中
北野中 4−2 八尾中
「決勝」
豊中中 4−3 北野中
（豊中中の2連勝）

（一般女子）
「準決勝」
成徳高女 3−1 八尾高女
梅花高女 16−1 扇港女商
「決勝」
梅花高女 3−1 成徳高女
（梅花高女の2連勝）

（関西選手権完）

地方だより

▽…第2回東海室内選手権は1月27日名古屋の金山体育館で東海四県の予選勝者が集り行なわれた。男子は中京大（愛知）が、初めて東海地域の一般タイトルを獲得、女子は愛知紡が圧倒的な強みを見せ2連勝した。

（男子準決勝）
中京大 24－19 鵜の森ク（三重）
全岐阜大 15－13 清水商高ク

（同決勝）
中京大 28（14－6、14－6）12 全岐阜大

（女子準決勝）
田村紡 19－5 大垣南岑会
愛知紡 13－9 静岡城北ク

（同決勝）
愛知紡 21（9－4、12－4）8 田村紡

▽…大阪府室内選手権大会（12月22日、大阪府体育館）

（男子決勝）
春日丘ク 14（6－8、8－5）13 三国丘ク

（女子決勝）
大谷ク 12（7－0、5－4）4 高津ク

▽…第3回三重県実業団選手権（三者リーグ）は12月9日東芝三重コートで行なわれ、本田技研が優勝した。

本田技研 23－22 東芝三重
東芝三重 14－12 日本合成ゴム
本田技研 13－10 日本合成ゴム

▽…第6回宮城県選手権（12月1、2日、東北大中央体育館）

（男子準々決勝）
仙台一高 9－8 仙二高ク
東北学院A 12－8 古川工高
古川工高OB 11－10 仙台二高
ハーネス 12－8 東北学院B

（同準決勝）
東北学院A 20－5 仙台一高
古川工OB 14－13 ハーネス

（同決勝）
東北学院大A 24（9－3、15－2）5 古川工高OB
（東北学院大学は4連勝）

（女子決勝リーグ）
涌谷高A 10－4 宮三女高
涌谷高B 15－3 宮三女高
涌谷高B 14－9 涌谷高A
（涌谷高は6連勝）

▽…第8回茨城県選手権（1月12、13日、県営体育館ほか）

（男子決勝リーグ）
石岡一高A 10（引分）10 土浦工高
茨城大A 25－7 石岡一高A
茨城大A 20－9 土浦工

（女子決勝）
水海道二高 12（5－2、7－3）5 西峰ク

▽…第2回大分県選手権（1月27日、県営体育館）

（男子準決勝）
国東農ク 15－4 大分記者ク
日体大OB 12－10 中津ク

（同決勝）
大分日体大OB 19（9－11、10－6）17 国東農ク

（女子決勝）
臼杵高ク 9（6－3、3－5）8 中津北高

▽…愛知県選手権（1月13、15日 松蔭高体育館）

（男子準決勝）
愛知教員ク 19－4 昭和ク
中京大 22－14 新三菱重工

（同決勝）
中京大 23（10－4、13－10）14 愛知教員ク
（中京大は2度目の優勝）

（女子決勝）
愛知紡 29（13－1、16－1）2 中京大
（愛知紡は4連勝＝5度目）

▽…第4回岐阜県選手権（1月19、20日。大垣スポーツセンター）

（男子準々決勝）
全岐大 14－9 GMク
白梅ク 12－4 全大垣ク
加納高 16－5 岐山高
大垣南高 12－7 岐阜商高

（同準決勝）
全岐大 8－7 白梅ク
加納高 22－4 大垣南高

（同決勝）
全岐大 13（5－6、8－6）12 加納高

（女子準決勝）
加納高 4－3 大垣南高
大垣南岑会 10－2 大垣北高

（同決勝）
大垣南岑会 4（1－2、3－1）3 加納高

▽…第5回三重県選手権（1月13、日、津女子高）

（男子準決勝）
本田技研 不戦勝 半田ク
鵜の森ク 16－8 日本合成ク
十四川ク 11－10 県立三重大
大安ク 15－14 国立三重大

（同準決勝）
鵜の森ク 22－5 十四川ク
本田技研 15－9 大安ク

（同決勝）
鵜の森ク 15（5－6、10－5）11 本田技研
（鵜の森クは3度目の優勝）

（女子決勝）
田村紡 21（9－3、12－0）3 津女子高
（田村紡は初優勝）

▽…第6回静岡県総合室内選手権大会・静岡県高校7人制新人選手権大会（11月23、24日）

（高校男子決勝）
静農高 15－10 二俣高

（同女子決勝）
城北高 17－4 沼津高

▽…第11回近畿中学冬季体育大会（12月24、25日、豊中王中）

（男子決勝）
貝塚一中 17－15 豊中五中

（女子決勝）
豊中三中 10－3 本庄中

話題のチーム⑭

盛岡市役所の巻

「全日本実業団選手権に出場しましたが、実をいうと一回戦で出ると負けのつもりで参加したんです。どこをどう間違えたか気がついたときには、ベスト4に残っていたんです。自分ながらびっくりしています」。主将の佐々木君（盛岡商高出）はいう。全国大会初出場でベスト4に進んだのはりっぱな話である。ほとんど無名に近いチーム、ことし三年生のチームで、四月には四年目を迎える。つまり35年の春にチームをつくり、7人制一本槍できた。「昨年5月の盛岡市民体育大会に出場して岩手大学と優勝を争ってから急に自信をつけたのです。なにしろ部員は10人ですから大変です」というが、その表情には苦労のかげは少しも見られない。佐々木をはじめ千葉（東京学芸大）、斉藤（明大）、昆（盛岡商高）、栗原（盛岡商高）の5人が経験者。あとはバスケットボールからの転向者である。全日本実業団に備えて退庁後の午後5時から8時まで練習し、旅費のほとんどは自費とか。年間市職員組合から約一万の補助があるが、これはすべてボール購入費。「体力がないので決定的なシュート力がない。これがウィークポイントです」と佐々木君は話していたが、なかなかどうして、「山本市長、川村助役の声援があったから勝てたんです。」とことばを結んだ。

投書欄

7人制は球界の勝負

ついに7人制の一本化が決定した。

11人制を惜しむ声もあれば、いやむしろ遅きに失したという声もある。私の周囲は、おおむね7人制一本化に賛成である。

しかし、ここで私は考えなければいけないことがある。7人制の全面採用は、ハンドボール界にとって背水の陣であるということを……。

7人制一本化によって、ハンドボールが、急に世間の支持を得て、国内のメージャー・スポーツにおどり出るとは考えられない。ハンドボール界にしてみれば、今回の決定は〃勝負〃である。

協会幹部のモノの考えかたも、プレーヤーの自覚も、このさいすべてを一にもどして再出発の気構えをすることだ。そうしないととんだことになりはしないだろうか。

（宮城・島村生）

OB戦の実現を期待

東京の友人たちの話によると、最近学生のゲームは大変おもしろくなり、リーグ戦運営もまことにうまいそうである。

そこで学連諸兄にお願いしたい。ぜひ今シーズンあたりから、OB同志のカードを実現してはくれないだろうか。組織的な対抗戦でなくとも、交歓試合だけでもよい。

7人制に変わったいま、OBのメンバーも編成しやすい。聞くところによると実業団選手権には、なつかしの顔がみられたとか。リーグ戦開催日に一試合づつでも組んでみたらどうだろう。やがてはOBリーグ開催に発展し、おもしろいと思う。

（静岡　GT生）

☆……長野・一OB氏よりも同様の投書がありました。

無意味な教員の部

国体の大会要項は一度決めたらなかなか変えられないそうだが、あえて一言。

ことしの山口国体から、教職員の部を設けたのはナンセンスだ。

これまでの一般男子の部に出場していたチームでも、主力が教職員だったところはかなり多い。

教職員と一般男子を分けるほど、競技人口に厚みがあるとは思えない。

それより実力伯仲、強力チーム目白押しの高校男女、一般女子のワクを広げるべきではなかろうか。

当の教職員の諸兄にしてみれば、自分が出るより自分の育てたチームを出すほうが〃楽しみ〃である。それが〃励み〃になるのではないのか。

（東京・小泉昌彦）

質問欄

本号の質問欄には、東京の武田譲治氏ほか六人の方から「スポーツ少年団」についての問い合わせがありました。その質問だけを採り上げました。

日本ハンドボール協会は二月の定例全国評議員会で、四月からスポーツ少年団の組織を活用してハンドボール少年団の編成を行なうことに決めました。

スポーツ少年団というのは、日本体育協会と日本スポーツ少年団本部が、その活動の中心となって組織するのです。同本部が出した解説パンフレットによると「毎日、都会や村や町の空き地でキャッチボールしたり、泳いだり、キャンプしたりしている少年たちを、もう少し組織的に、もう少し計画的にしたもの。同じ町、同じ村、同じ部落などの地域で、同じようなスポーツをする目的をもった少年達でクラブ(団)をつくり、それを登録したもの」ということになります。

対象は原則として12歳から15歳までの男女中学生や勤労少年。クラブ（団）を組織したら、全国の市区町村の体育協会か、またそれに準ずる機関のスポーツ少年部に登録することになっています。

登録は規定の用紙に要項（九項目）を記入するだけでいい。登録されたクラブ(団)は、そのスポーツ活動を行なうとともに、日本スポーツ少年団本部の指定したスポーツテストを年二回以上行なわなければなりません。

運営費は、原則として会費でまかなうことが理想とされています。PTA、婦人会などの後援組織をつくって、そこからの援助で資金資金を調達しないと、なかなかその活動が軌道に乗らないのではないでしょうか。

スポーツ少年団は、選手を養成する団体ではないスポーツに親しむ機会の少ない少年に、その機会を提供するのが狙いです。大きな競技大会は原則として開かれません。

ハンドボール界が、日本では未成熟のスポーツ少年団活用に着眼したのは、競技のPRという面でもたしかに注目されるものがあります。スポーツ少年団活動自体が一般にあまり理解されていない。軌道にのるまでには、ハンドボール協会の強力なバックアップがなければ、相当の時日を要すのではないでしょうか。

特に各中学ハンドボール部との関係など、研究すべき問題も多いようでいっそうその感を強くします。

（文責・杉山）

編集後記

▽…日本のハンドボールも7人制になった。4月からは新しいシーズンにはいり、どこへ行っても7人制のハンドボール。新しいものに興味を持つのは人間の常である。高校男子や大学チームの選手はすべてが新しいものといっていい。ことしは〃ウサギの年〃。新しいものと取り組んで、ウサギのように大きく飛躍してほしいものだ。全国のハンドボール愛好者のためにも……。

▽…本号は世界学生選手権の記録を掲載しました。初参加にもかかわらず、選手諸君は健闘してきた。7人制のヨサをたくさん持ち帰って……。遠征中に勝コーチが盲腸炎で入院する騒ぎもあったが、渡辺監督の統率力が物をいって無事帰国した。ご苦労さまでした。

▽…ことしの発刊は13号が4月、14号は全日本学生選手権終了後の8月、15号は山口国体終了後、16号は39年1月を予定しています。期日までに発行したい気持ちはあるのですが、印刷屋の都合でいつも遅れています。この点あしからず。読者のご希望に沿うようベストをつくします。

▽…本誌はハンドボール愛好者のものです。レポート、写真、研究発表、大会の記録、県の球史、投書、質問、協会に対する注文、ご意見があればどしどしお寄せください。いまは記録保存の意味もあって記録中心に編集していますが、近い将来にはもっと充実したマガジンにしたいと思っています。よろしく。（ふぐ）

日本ハンドボール協会編
ハンドボール　第十三号
昭和三十八年四月二十五日印刷
昭和三十八年四月三十一日発行
発行所　日本ハンドボール協会
東京都千代田区駿河台四ノ六
電話（261）九五一一〜五　振替東京五八三四八番
編集兼発行人　高嶋冽
定価五十五円
（〒）二十円